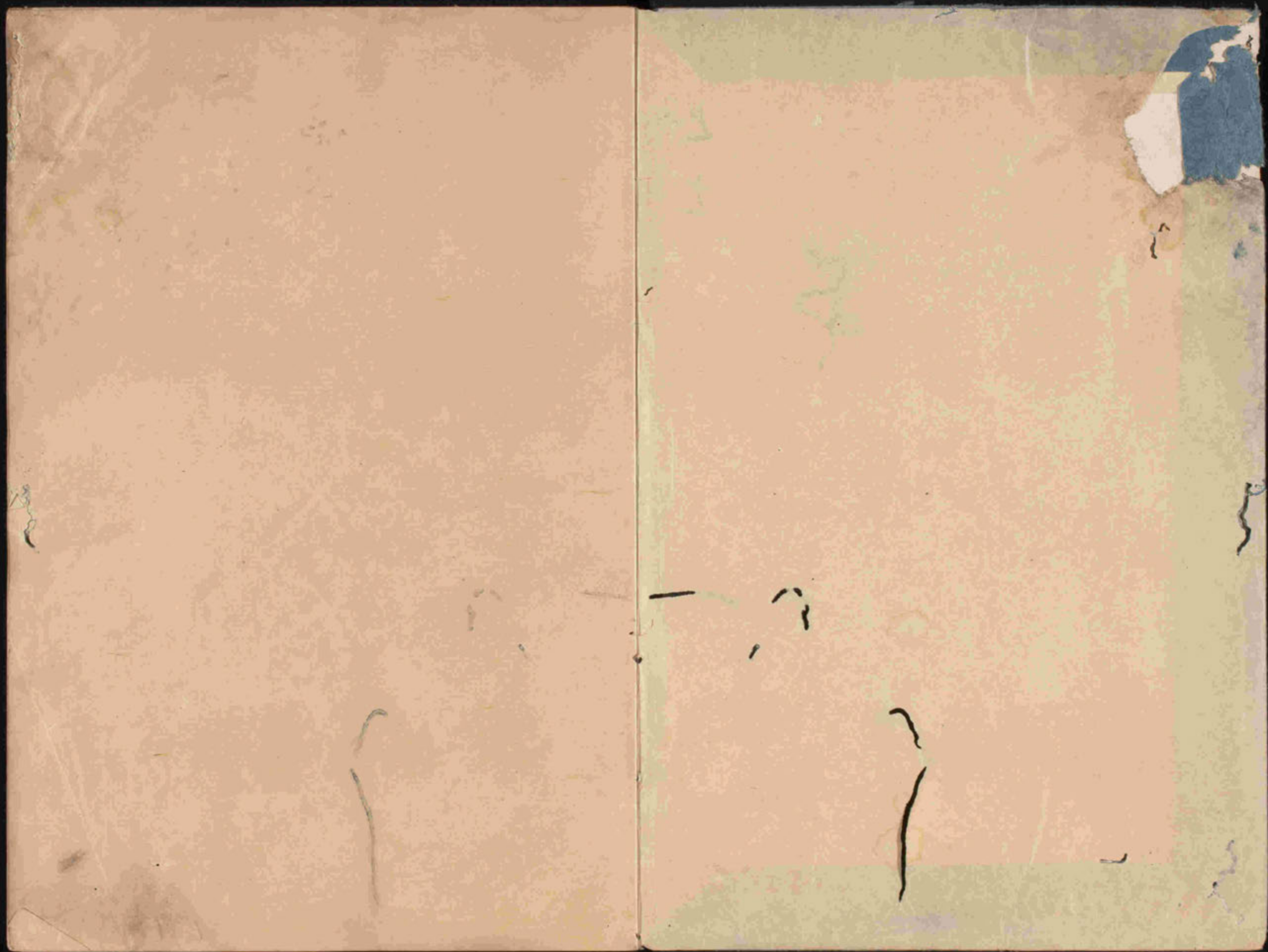
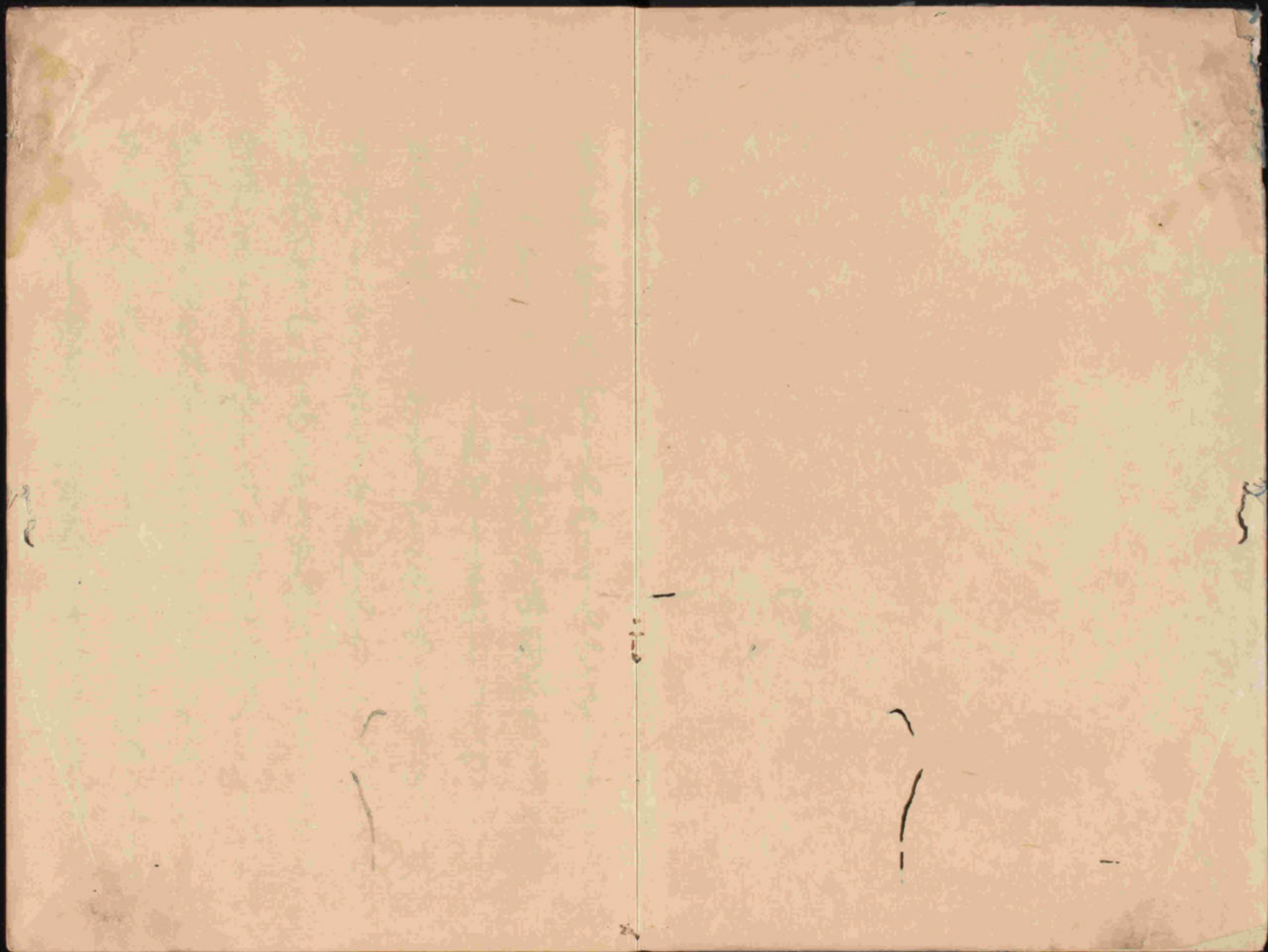


續古今和歌集





かまこころにうれき書奪れじりのさしはひちり
らふちし乃葉をうめくりにくく現鳩のこみき
そふよかみれをくみくこ中しそとにけり
一葉にうらごころのこころはちあはれこころのゆ
しぬいよりによつこつと中園にのちたる時を
年をいふ中つこころち用のちさうぬはのみら
びつこ思ひをむくつこけれいあよるけれ
人の春煉をうら情をうらさしはひの野にせし
うとせし一葉にうらこころの勅撰中よかき高
葉集にうらみこころのみこころをうらさし

しりこころにうれき書奪れじりのさしはひちり
らふちし乃葉をうめくりにくく現鳩のこみき
そふよかみれをくみくこ中しそとにけり
一葉にうらごころのこころはちあはれこころのゆ
しぬいよりによつこつと中園にのちたる時を
年をいふ中つこころち用のちさうぬはのみら
びつこ思ひをむくつこけれいあよるけれ
人の春煉をうら情をうらさしはひの野にせし
うとせし一葉にうらこころの勅撰中よかき高
葉集にうらみこころのみこころをうらさし

らしてしまふにせむのたのしみは久しきよし
かた露雪ゆきをきくる折布ぬいはらんからよきなり
しにかつたわらひはよきいふ事あるにせむの集
を續古今といひし事いせぬふ古今集をきくは
て後他の勅撰しやくせんなくくう我もかゝるはく元久し
新古今と名をきくると古今の字を信せら
るゝ則せらるゝ人の集をわらへくちりしは
うらごわらひにせむくるるは世にせむは
人よきしきりしやかじらるゝるよかの
二代のわらひしきりしと今と又こ世は年よわらわら

くけりかきしりかふくちる多しあはれにわら
し門に乃みらよのしきりしは野のつらふ
はかりし年をいふ雪のわらひしははく
あはれは雪のよきふはくしきりしは
みらよわらひしきりしははくしきりし
里のしきりしははくしきりしははくし
はくしきりしははくしきりしははくし
しははくしきりしははくしきりしははくし
はくしきりしははくしきりしははくし
はくしきりしははくしきりしははくし
はくしきりしははくしきりしははくし

續古今和歌集卷第一

春哥と

ゆい春の心を淡ゆけり

蘇中納言定家

春ようこそ天乃くまふし社雲わたるひめ春つまはら

崇徳院は百首哥ひたひたをけり春哥

藤原清輔納言

いづり年のうらみ海ちのを我によの能くはゆきとる也

右人信はゆけり村家は百首哥淡ゆけり

春哥

後法性寺入道藤原白左衛門

今胡み我いとよみの夜あらとけて上けりしよき春の来りて

春の来りしを ちか門池御尋

胡みけ乃とよみ夜りしよき春の来りしよき春の来りしよき

初春の夜をよみかへり

前大納言為家

歳みしよき春の夜にのりしよき春の来りしよき春の来りしよき

寛治二年の春の来りしよき春の来りしよき

太上天皇

いづくより春の来りしよき春の来りしよき春の来りしよき

春の来りしよき

中務卿親王

かたよみ乃みりの濱ねりしよき春の来りしよき春の来りしよき

百首の春の来りしよき

光明寺入道前持の太子

久々の天の戸の来りしよき春の来りしよき春の来りしよき

初春の来りしよき

地貫之

春の来りしよき春の来りしよき春の来りしよき春の来りしよき

中務卿親王

凡そしよき春の来りしよき春の来りしよき春の来りしよき

春の来りしよき

前大納言為家

今も春の来りしよき春の来りしよき春の来りしよき春の来りしよき

建保三年の裏に百三言なりける時

兼中納言定家

音羽河雪けのちみも思あてて用ひのちるに孝はまの院

孝はりのめの言 後京極権政兼右大臣

あや水のしほ思こて清滝川は孝凡うもく

百首ありの中は 後鳥羽院御言

孝凡いづくのあけしこけてよと思ふく志願はる後

建保四年百三言なりける時

光明寺入道兼権政左大臣

音羽川滝の水と雪きこく納言いにはあとのしほ

孝のち言中に 順徳院御言

孝日野やあこ思く我の孝凡はあをいするも秋乃橋京

歌しあり 権中納言長吉

みらことつふにじいへ成もつとくる人のその秋の橋京

正治二年百三言なりける時孝言

兼大納言忠良

あふに秋のしけしはれさるる袖もさるる孝のあは雪

文永二年七月白河しるる七月百三言なりける時

とゆへ 兼左大臣

清らゆる雪あはるるのしるる下はせらるる橋京

君を讀みける

前人納言為家

あるじいつの夜も白妙にうめいのついでに雪うる

衣笠前人大夫

浅くして露のころもさるきぬすうのみま今に

ほ二位が隆

うらむつふかじのたつともめと雪の音は

古脚門地は

ゆつろ乃つふなわ^ねつたつ志野の氷は袖を

雪中子日とらふをよりとぬける

白雪のきくわぬのたねをくして雪のまいたる

田舎のちけじき野の子

平兼盛

はのいへるあつたのゆきをぬる

永保四年中宮子日に

贈太政大臣 経実

あつたのゆきをぬる万代よりのまに

子日のんを

太上天皇

子日とあつた乃ち道わあつた昔をうる

延喜六年三月の令書

あつた乃ちあつた乃ちあつた乃ちあつた乃ち

考の止言の中よ 今上御年

わらわしつげしこききむをうけたまふ人よ初もゆきけり

入道

道助は親王家よ十三年言よ雪中堂

入道兼右大臣

くらげこ草よゆき雪の中よしりけり雪堂は

西園寺入道兼右大臣

うらきしりもゆき雪の花のよしりけり雪堂は

道助は親王

梅のよきうのわらわき雪の初もゆきけり雪堂は

雪乃ちりけり日言のちりけり

上東門院

雪よ花よゆき雪ふれりゆき雪の初もゆきけり

雪中梅花のよきけり

花の飛ち

梅のよきけりゆき雪をゆき雪の初もゆきけり

ゆき雪

藤原基俊

紅よゆき雪よゆき雪の初もゆきけり

正治二年ちりけり百言の考言

皇太后宮大夫俊成

ゆき雪のよきけりゆき雪の初もゆきけり

花洛春月也

後二位家隆

春月とて花乃みまに花のこころ雪けの月凡そ白す
建保四年ちりけり百その春月

入道藤左政大老

かうしお三輪の松系の夕とと昔やこそくこき思
ちり門内大老家とく野原を

後京隆信朝也

わさみしとつらとつらふるとる野みりしこの林枝
歌——と

し方と月月のつらとつらふるとる野みりしこの林枝

柿本八丸

あはれと春日の系をみりしと小松とくよあゆみ引
弘治二年の百その系を

中務卿親王

春月とて花乃みまに花のこころ雪けの月凡そ白す
百首言りけりいかに

順徳院上り

浪西より夕日と我ら高砂の松のうらとを子よは
建仁元年二月言合よ鹿陽遠村村のいよまは

赤中納言定家

入道前を改大也

野々山と句ににみたる紅乃こころめれ梅の花のよき凡

寛治二年百三十一の中も梅並凡と云ふ事

つらき梅のよきと云つて思ひの外にみたりと云ふ

正治二年百三十一 藤中納言定家

うらつちのよき人かきおし句にうなる野の梅

梅のよき 後原義孝

春風乃こころを種は梅のよき木す急れ外もくに句に

真子院殿の胡土のよき家も梅れを後入

よきと云ふとぬわつけの時後休け

伊勢

思ひ出さるみよこころと梅花流に句にのよき

藤原殿の女卿家言合に

平兼盛

つらき吹く風のにがくは梅のよきアちり

更衣元善さしとらとゆりわける日

光孝天皇此哥

梅花ちりぬるゆきよみし人くまけこの雪さうま

歌し子 柳本八丸

つらきに雪ころ梅を月けし物さきにみじんとら

梅花を後休け 衣笠前の人

ふりてはつとせりる月いこちてよふこほに白く柳こ

百三言の中よ

後京極持政前左大臣

新こも中こもつと思文言にまて我思親の春あうは

柳をよあろ

し退赤人

浅みしてうめひけあちこみ切り思春の柳いもい出ふあ

層柳を

人納言通方

思我てほりみしてとるり春風は浪より層の青柳の糸

百三言の中よ

中務マ親王

思く思くこよあいこよけつとみ岩川の吹とよめてらま柳の糸

前左大臣持政前

あめこにしりり我あまき柳のいこみ我て春風吹

道助は親王家又十言の中よ

后二位家隆

重いぢりぬよとの春風吹らるるあまゆるとあから月あう

中務卿祝王家百言の中よ

中納言

うらまひこころの思うらめみらるるまよこし月か

後久我前左大臣家十言の中よ

土佐門院小宰相

春あけぬこしにきくほこしの夜をみすら月影に

花言言

九大夫

わささしおまご思ひ梅つるほにらんがけつと

後鳥羽院文御

みくことおもしつらに咲初もむおくわらみうのし

後堀河院民人曲体

ようよみらがしつら一の白せは風う白(花)つと

建保四年百二

後二位家隆

梅花ささぬきけがしつら一のしすつらうは白せ

喜ふこいふ事を

順徳院出言

白せつ花よりうらうらう梅うささかつら一のし

おま百番言合

大徳有宗

かじつらうららのしれお盛せのうらるををみか

行路為花こいふを

後系清補納長

かゆよ花の梢も成し言つとよそよみにしる事れ白せ

花言中よ

藤原雅有納長

よ一野の花よりおくの白雪つらうらる事のこころあ

太山寺大貳言遠

白せ乃しれらしこみにしるあがれ花の白ふるあ

入道前左大臣長

梅文のしむるのり衣きじくつる我々孝女の時
は成ち入居お持ぬ家屏凡よ

後系も能

いづくの春のんもさじくさゆさうにさける山梅の家
名所花といふんを 前中納言守家

りよみくさのこのきの梅花春女さくさく入つてさくさく
是も六年三月三まの今日梅を

前太政大臣

ちとみからうすはさうさかぬる梅よ

うじの春の明ほの

續古今和歌集卷第二

春哥下

龜山の仙洞より吉野山の橋をわたりて
うへへーつ花のうけをみく

右上天皇

春しよ思ひて我みよ野の花はくわう若くは

家の言合あひあひもらるのうこ

中務卿親王

ふね娘とよのこくくやくすくゝ露の袖のむより我

百もうんくよよと休けり

河津掾政左大臣

ふきよめ衣の袖さむくんむりくくすく花のまも

前入納言為家

初をち乃々年の橋花のうけえくくきく白小春凡

清慎二月梅も花みはける時淡はら

平兼盛

と橋あくゆくをみけり小もちるくく凡もあは

建曆の比南殿の花思ひてあらしすしてよ

ぬけり

後鳥羽院上

吹凡もあふれく代れくこい花みら時をまじおほる

建永六年三月三首の合

休庵行家

かひなくもわづねのまらふらうらうらやむまらふ

花の申

右と申持経平

言やうと考の日記と思ふころ花みくわゝ思ふあをれ

寛治二年百三首よ見花こりふんを

太宰権帥為経

みくも信にのまこま思ふのころとわの思ふ

歌しす

喜司郎按察

吹凡のうら思ふふいと思ふ我ちんをけけ花のけ

右人きよふけらほの百三に花をよめら

後法性寺入道藤原白家下

こぬほいぬれふふわの若の花う人のかこけやんれ

花月百三首んくよよとふけら

後京極権政藤原白家

くあこすい庭よやわしのりし我んふ人のむのさうを

万也二年十三首誦ふく静見花こりふ

ししを

右と又見

あつれまわりの梅の花こり我あうらうらうら

藤原白丸大夫

ゆのまはし花の心を思ふにちかむるにや
是れは東文の屏風也

貫之

かじみけのわがこ思ふに横むちりえ後うのてきよ

西園寺のこ花のわがこ後ゆける中

入石麻呂大長

此里のこををせかみけの都うのこ思ふの文書

かゝててみろわりゆる横花のこ思ふに雪にゆく

弘長元年百三十四年けり

前大納言為家

ゆらうらちの思ふに横花のこ思ふを面敷のこ

む乃はゆりこ思ふにゆりける

月花門院

花の思ふに思ふに横打る人のつら

花の思ふに思ふに

堀河院中言

ゆらゆらを思ふに横花のこ思ふに思ふ

日吉社(又)十三年思ふに思ふに

後鳥羽院言

ゆらゆらを思ふに思ふに思ふに思ふに

す方祇のちるこ日おれと梅花ちる及のししびりつ紀
西院皇后宮古比門右大夫家より留志る
時三月梅のころわにと達部殿と人参つとわ
ういけつよかちるをさわく

大納言経信

をちるへは吹留む凡のさちちりじむをせよとあ

花言

鴨長明

吹乃くろきこのみさこの谷凡は梢ととわねをみろ

百言

左大夫

恨心くさひのさちちるをせよとあ

前用白左大夫

山桶と我とわわに咲るゆりむの名こては春凡さく

歌

入道 惟助信親

うさくしにまにらちるをせよとあ

又水元年内裏にちりける百言とをと流

花を

大納言良教

友にけり花のし雪吹とをて凡う庭の辺いさけれ

又百言

大納言通具

吹らふとて凡かきてけしね庭の花のよき者

直殿門内丹後

春凡さくし我とわわに咲るゆりむの名こては春凡さく

陽明門院乃姫まこと申付けける内よりあはれ
ぬける又の日記のちりけるをぬくことせしめ
けり
枇杷白々屋文

まことまをうしちちのむやうちひんを恨まが
歌しぬす
式子内親王

夏乃うらうしりくもははるけい志しんるる孝の修養
正治二年ちりける百三
麻大納言忠良

思ひぬの若海よ白くむをさくしりてみと世月のそと
宣敷門院丹後

つとみけむちう孝の朝りも後まひのうこと志勢
春三のうく
人丸

あやしうくく志しん橋孝の氣がきくく後を
躬恒

ちかうしにわらゆめを橋むゆと世ひのうこと志勢
道助は親王家又十きよ山花を
名三

はらうしにわらゆめを橋むゆと世ひのうこと志勢
二位家隆

山娘のつとみれ袖うらうしむとこよみてまをうら
雨申思花ごま事を 後鳥羽院寺

西夜思花こりしうらなうのなごころにけしきつはじま
けしきつはじま
一孝成卿奇

くくくよの雨うらなうらなうてあをを考のこころ我を思ひはじま
寛治二年百三十三のうら

藤内大夫

あまのうらなうの思ひはじまうらなうの思ひはじま

たう中に
入道藤内大夫

おあはれくくあなうらなうの思ひはじまうらなうの思ひはじま

源後頼朝

うらなうの思ひはじまうらなうの思ひはじま

祝部成茂

うらなうの思ひはじまうらなうの思ひはじま

延喜十三年真子成卿のうら

坂上元朝

氷うらなうの思ひはじまうらなうの思ひはじま

歌
山邊赤人

考の思ひはじまうらなうの思ひはじま

夕萱草こころを
た上天皇

あまの思ひはじまうらなうの思ひはじま

河歌
後鳥羽院

友也を讀みける。中務卿親王

笑ふを以て也我に折し友のむいづくもわらぬ考をよむ世

正治百三十一 後二位家隆

也我に折してわらぬ心もいづくもわらぬ考をよむ世

友——寸 貫之

うさるる松のたつてよわらぬもいづくもわらぬ考をよむ世

二月に折しわらぬの日友花を

也此也奇

うさるる松のたつてよわらぬもいづくもわらぬ考をよむ世

建保四年百三十一寸は

慈鎮大僧正

またゆへ考のつらぬもいづくもわらぬ考をよむ世

暮考の心をよむとぬける

後三条院也奇

初考乃をよむとぬける相坂の花はちちち

同三月花をよむとぬける

後京兆後納長

拂よわらぬもいづくもわらぬ考をよむ世

二月書の心を

かういづくもわらぬもいづくもわらぬ考をよむ世

右と人持通雅

かろくくきとくまひおしじと力よかにけつ考の列と

大江の里

わいれごいつの力のこころ思ひれらりゆく考をさうふ世の

在元元方

危也我考のころしおしこふけり教と命をさすや

入道前左政大夫

人いり危也る力よかたこの考のつり我と

るかつとん安

續古今和歌集卷第三

夏哥

更衣の心をよまるとぬける

古御門院也

きのふゆくと我れ袂のむのたつゆくとおしこ友とつと

文治六年女御入内屏凡

後京極持政前左政大夫

くわよりいみ代をくす移^{うつり}之しまに到^{いた}り(た)る友更衣

昔友人を

中務方親と

花うめ乃袖さふふいとらんとく更衣とあつと山梅系

二百三十九中一

雲井のうきし島乃をう梅らるくとのほりうま

砂むのんを 右と天皇

とにれらるま葉のしれをそ梅むのこは考のこゆわ

源後頼朝也

梅こよちりのうらじりしむみてう考のあし

弘也二年百三十九中にやむを

中務マ親王

わつらり考のうらじりしむみてう考のあし

梅やむしを 左を人好家経

まぐらうのうらじりしむみてう考のあし

文永二年七月七日詔をこくわく七百三十九

人くによよをゆいよやむを

大納言考家

やむれゆのうらじりしむみてう考のあし

夏三の中一 辰二位家隆

そしめまのうらじりしむみてう考のあし

承元二年冬使并館にこゆつらるわ

けりけり 前中納言考家

思つららるのうらじりしむみてう考のあし

堀川院也百三十九

建永三年十一月の中

衣笠前の人

ゆの光也を我のこ緒に引くすに我るもゆに引くす

百三三の中は 麻右人志

結とて思いつたる里のゆに引くすに結とて引くす

名所言ふ 後久我麻右人志

引くすすに結の種枝すすに引くすすに結を結に

引くすす 皇太后又又又後成

ほくく結々く我のしるるまをわきに結とて引く

旗子ゆ祝

結わす結よふく結と云わたりて結とて結とて

大納言行信ゆの免て休ける夕言はさの結を

きつて 小丸を

きつてゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

延喜十三年の裏屏凡言

九けり旅恒

引くすすすすすすすすすすすすすすすすすす

月歩両すすすすすすすすすすすすすすすす

貫入

結とて結とて結とて結とて結とて結とて結とて

郭ろと

月花門院

終らざる常しとておす所を雲のいづくの月日鳴し
んくよよものと休けり百々に郭ろと

中務の親

一ををわの子と月日鳴すてて天は戸とてらりて

山路郭ろと

りてててててての郭ろと今到ててて月日かか

歌し

山邊志人

是乃乃ててててててててててててててて

中納言敦忠

つてててててててててててててててて

正治二年人ててててててててててて

よとぬけ

後鳥羽院

やむのてをるてをててててててててて

夏乃ちうの中

秋よゆかけててててててててててて

日裏に百そりうてててててててて

中納言為氏

うててててててててててててててて

西園寺入道前を改てて家てて海邊

しを淡休多 前大納言考家

今海に移し移すわほしきすまみこ浦式にまきた
弘治二年毎上仙河の十きと野外郭を

休辰行家

人よりのほりきまをさつ海島つとわり野のこは鳴こ
又すまみこは慶覚郭を

前大納言考家

引しきす鳴こをまつては成よをのこす老の住を
弘治四年百まじり内を

入道前考家

かすし人よりつては鳴こは我がのこす

建ち又三年三まみり内を

是屋入道前考家

ちよはけのわすの里乃郭をまみりつては
前大納言考家
三よみゆけりて郭を

後京信實考家

胡戸のまみりわすの里乃郭をまみりつては

夏考中よ 芝後考家

わすのまみりわすの里乃郭をまみりつては

兼身法師

西きりぬ人のこころにほろほろとくらく度鳴と初ぬんあ

律守國年

車乃らあよとれつーあつ町さるこ月とこもねはよりーの里

寛治元年十月^{有の}あなよ又月孰ら

土御門院小宰相

里つ子るをやこ月のけいこす也いけいこすにほ

中宮大史雅忠

けいこすも也いけいこの一をを今いこ月とるこつあか

西中孰らと

蓮生法師

かきりるいれちのこころを練らまのここの月の面に鳴ら

歌ーん

貫之

みくれくおるこ月のあつめ草らるこあつにんか

堀河院侍

おとつら地のけいあつめ草らるこけいこあつにんか

人のこころにほろほろとくらく度鳴と初ぬんあ

和泉守

あつにんかよとれつーあつ町さるこ月とこもねはよりーの里

百三郎の申

土御門院侍

あつにんかよとれつーあつ町さるこ月とこもねはよりーの里

寛治二年百三十一に早苗をよめる

新庄并内侍

を山田にまきしる水の清き社袖にまきしるまきしるまきしる

兵部卿隆親

く我々の山田のまきしる我が衣がまきしるまきしるまきしるまきしる

延治二年申交屏付

貫入

けさの早苗といふくを思へしわきまをまきしるまきしるまきしる

早苗を

よき人

今朝のまきしるまきしるまきしる我が衣がまきしるまきしるまきしる

五月を

早苗を

五月をいふまきしるまきしるまきしる水のわきまをまきしるまきしる

河津橋政左大夫

まきしるまきしるのまきしるのまきしるまきしるまきしるまきしる

河津橋政家の百三十一

後三位行能

五月をいふまきしるまきしるまきしるまきしるまきしるまきしる

前中納言定家

まきしるまきしるまきしるまきしるまきしるまきしるまきしる

藤原門院女侍

思ひけいりくはの又月面にとくも水の園をりき

歌一十

祐威法師

又月面にみくはつさうさうさうと世にうけう海らこの舟橋

雅成親王

さうさう我乃にさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

海は五月を

辰二位家隆

中くさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

歌一十

さうさう我乃に我乃にさうさうさうさうさうさうさうさうさう

百々さうさうの中

土御門院少将

さうさう神乃白を凡のさうさうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうを花橋のさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

正治（いんげん）のさうさうさうさうさうさうさうさうさう

宗連法師

水ちりさ花橋のさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

守覚は親王家の又十さうさう

皇太后上人更後成

さうさうさうさう花梅の神代書にさうさうさうさうさうさうさう

又百番さうさう 二重花讃歌

ゆさうさう花梅のさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

歌一十

慈鎮大徳也

うの袖のちりきりるるし古里の花橋はあうこのりあ

大納言様人

橋乃花ちりきりのりきりすきりきりるるね能

順徳院出立

きりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

正治二年百三十三 前中納言定家

きりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

後久我前左大臣

きりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

寛和二年内裏言合に

持大納言成

いふあ乃うのら影きりきりきりきりきりきりきりきり

中務卿親王

いふあ乃うのら影きりきりきりきりきりきりきりきり

前内右基家百三十三言合に

鷹司院師

いふあ乃うのら影きりきりきりきりきりきりきりきり

百首言合にけりきりきりきり

休庵行家

花を思ひしを心せしむ我世の下に世世の心くこし

夏^の歌の中よ 源重^の女

夏乃くいまに人しるこ横た戸もあをさうのこわす

中務命婦

月のこす桂の板戸こしりなうし流わをよして叩水籠を

夏月を 入道前を政大夫

あよしにふん思わの清水うこみて氣まよしわ夏の月の

眞性法親王

さしぬこみろねもるこ夏のをゆこれても夏七月の

前を政大夫

夏はせこいしり夏のよきゆこよいなりしる月の月

歌しりす 後鳥羽院中

夏山の楯は葉うよこ吹風よ入り涼ふむくししの夜

家百々の中よ 後京極持政前を政大夫

鳴きみたりよこふん娘ひて木陰涼ふ夕言れ夜

百々の中よ 中務命婦

松凡しらきし成思ふ心れ其のま乃夕言のえ

後鳥羽院中を政大夫の中よ

入道前を政大夫

凡はく志のこねわりの夕まよる成思しんらう村電

村々をこいふ事を 正二位左大臣

かつた火の煙うのこふ文をわすれしすゝあをならせし

歌一十寸

七条業平納札

言うべき友かしくしなるし世にうの事ごとく物を出た

瞿麦を

うまゆま

休辰行家

あをこようらてもくふあさふにうつろく甲代もいほ

夕つかのさげをみかくよあ

平政村納札

る路のちうふのうの程をこよあをうてしる夕つかれを

正治二年百三十一

小休辰

咲をてつらうこ人よこいへてあをうとろり夕歌の

歌一十寸

柿本人丸

多道に秋つゆくといあ人の野中草かりをてあひ

百三十一

後鳥羽院出寄

ちこそこのうらふよわ草代もさうしすむじ比

交三の中よ

後京極持政前を教人ト

松川乃うをくくすいこよいりううの床のうら

百三十一

後京極後納札

此うらなるう水をきこくあ陰すこ中何の宿

も是は親王家の又十三年の中は

前中納言定家

うらあひくしをみつたはあかしのとくは後醍醐天皇の御代
杜内原こゝろまじと 辰二位成實

夕すみきよしじりあゆもまつたのくくはあの下を
はちえき年百三十三の納言也

信實切也

はの園ちるよ乃里の夕すみきあかのひは後醍醐天皇

交凡こころを 徳大寺丸太

夕すみきよのくをうを吹凡の両さこは後醍醐天皇

交後也 権中納言長雅

みうく河さく交つこよら流のくつ交れつ我るを

辰二位家隆

交れくならあかの河に我水にうこまつ

建保百三十三の納言也

前中納言定家

あかの河さく交つこよら流のくつ交れつ我るを

うのちのちのち

續古今和歌集卷第四

燐哥上

秋之日談タニはる 中納言家持

西の山に燐を思ふに夜も山吹くは凡のまろくても

百の山に中納言 順徳院中納言

限わ我のまのふは西の山もや水のまの山吹の初凡

建永三年秋供言合

入道前左大臣

白鳥乃到くくをの濱青京凡よあまの山吹のま

前右大臣

あはすの衣と涼し福あふあまのまよとて我を燐は

式子親

燐みくはくくをの吹凡のまよい斗成はけ

寛治二年百三三の早燐の

新院女御

燐き一也い思をく吹凡のまよい西の山を

前左大臣

吹うめくくをの燐凡よい神のまけ

燐三の中

慈鎮大臣

泪よりくく神よあまのまよい燐のまけ

後鳥羽院の片所燵十を撰り合ふ

蘇中納言宣家

しんがくあまのしほれきるる恨てう吹燵の初凡

江早燵とちゆを 中務卿親王

凌子夕浪とてしほれ海のまのるくの燵は初凡

道助は親王家の又十をに早燵

蘇藏雅行

う蝉乃らよそく春と歌きしうそ夜と燵はう吹

歌一巻と 鎌倉右人

今よりい涼しく成思りくじのあくしを此燵の夕や

嘉保二年郁芳門院蘇載合の言

指入納言の實

ゆ葛とていれをよきうね宿るをうくや燵の凡は

燵乃此言の中よ 今上御哥

燵まていりくしう有けれ吹凡の音とて此をよを初秋系

東二条院兵衛佐

かゆしむいりけるるま乃つてもこととて此は燵の初凡

中務卿親王家百を言

平政村納言

るをいしう秋とて葉も些くは思へうと燵の凡は

娘寺の中

女法師

萩乃葉にうしろしめて吹凡よおしと調や春をくらべ
後ち好庵とくく娘とて撰言合付けよ

後二位家隆

秋凡はくくもわの争りし萩乃葉をわたり言ふ

あま百番言合に

後ち好庵と奇

うしろしめ秋ら々のくふ小あめね宿萩のとも

百番と奇の中

古柳門地と奇

夕に秋はくくこの萩を吹凡のめみ思娘をくく調ふ

くく娘と

女柳園子女と

娘乃くくわらくくこの萩のくく我は萩乃凡の言を調ふ

まは崔池と奇人(那の言合)萩城

よみ人くく

吹くくくくす秋も秋凡のやとて萩乃くくくく

萩凡と

天台庵と澄覚

萩の葉はわらけけの物を起ゆ(春とくくく凡の言)

娘寺の中

地友則

吹くくくくくくくくく娘凡をくくくくくく

山邊赤人

天のけ氷くを草の秋凡はくくくをみ我は海はくく

天河ア子の河原に船りまきぬ凡ちくこいれはしむが

七夕三行

小野驩を致人た

あまの川勢まじりてくまぐこわつよ川流の舟あすし

七月七日東に多座よせしとをぬけ

上東門院

言を河川まわの秘とあいにわらふりよ勢の橋

片なり

東に多座

鶴乃どりのつとを雲あまのけわひのえを信う

建保四年の百さらぬ娘三

光明寺も入る麻拵致人未

天のつくまををらる娘ははりあひを結勢のこ

七夕のらな

素還は師

あまの河川の舟と秘とあいにわらふりよ勢の橋

光明寺も入る麻拵致人未

正二位知家

かうしつ乃雲わの橋はまけれらうらわ申は好月相

弘治二年百さらぬ七夕

申勢御親

七夕乃まじりにわらふあまの川はまする申の園にるり

西院身屋にまじりて言淡はける

いしよと嘆息わしよやうのりかぢ者の娘露の花

娘露の家と月の下と我らと

後頼納末

秋露の下等一月のやうにうすいわをてア家の娘をよけ

正治二年百三十一

式子日記

りり交うと我よんわか様弓むく陽の野への萩代朝露

萩と

大貳三信

きやうにわけよみせら娘露の家わし又枯の凡

正治二年百三十一萩屋

鷹司隆按察

えりか屋の娘もこのあけこのと我より陽る宿にわしと

十三年のちわけらうと

前左人末

引しつとあう床いよまじの娘凡よと笑えいくをの萩系

えりか

人丸

露乃花ち〜わい童也娘のるとりかるわうまのつれ

夏重女卿の前裁合の音を判とる瘰癧とる

よわいとわけら

延喜御言

花乃ま〜い〜う〜う〜にみゆと大娘の心引しにわし

娘の野原のいゝをよみ

仔細

咲もるをみれこしわのね株の野にりてさす我すのゆり

草花をよめり 中務卿貞年親し

夕芽がのふみゆら女郎も我すあさぶよ家アしり

後惠法師

けしをぬののよれ女郎花思ひふれてあけり

本流贈をぬ大夫家の前載合り女郎もを

讀人不知

ふむくともや人いみちし女郎も思ふくまを凡と吹けり

又百さらちう中し 後多明流法師

女郎も花のゆきしに春をていつくたに我の愛つと結し

建永三年九月教供言合し朝草花こい

しを 左を中將行平

白家のゆ花の乃女郎もこれこふきりけりあつた

康義ら家言合り^片草花

此付文

ゆ水日歌をうけきら女郎も志この心を後よめり

長久二年八月松尾社に行事あけりを考交

の女房車おより草のむをこりてさす野を

うらう人いみちるくぬみあけりをを素可也

百三首の中よ

後鳥羽院片言

しつしつとくさける納ふにうかづこの泪をくじ

建保四年百首の中よ

兼中納言定家

おのりくつかいちらの納家う草花枝の志がら斗に

歌一十

ちか門院小宰相

ねるくわんれつうしるるよあしうあさ旬いこぞ

土御門院片言

あ乃思こわこよそらこふあはる煙はきつ後よりこぞ

夕言はじくくの宿は白雲と思はわれりや袖をくく

百三首の中よ

中務卿親王

いとまゝなほくくはて煙凡のやうきけてもあを枝と

辰久元年の裏十首の中よ煙夕を

入道前太政大臣

吹くく野系のはたたく我も袖よこゆら煙の白雲

甲一をよめる

持大納言殿朝

煙はなはたよいたくもくく我思家の袖よをく

寛治二年の百三首の煙夕を

正三位定家

此煙はじくくわまつよをく老や夕のわが我こぞ

日吉社百々言々 慈鎮大信正

夕言言略々しに擇のわき我休思いにいじりて神に也我をし

妹々を

前中納言守家

秋より詔すていとお出なりし此里のまぢりりし思ひ

建仁元年申す言々

后二位家隆

いにしへより女物のけの國共わ金の里共妹の夕言

建永乃ころ太秋宮にすしをぬけり申す

申す中々

後鳥羽院出言

そくすいけの妹々より春をくめし袖のちり色

みりの思はけらるるしと信じて守の夕言

建仁のはりしすしをぬけり百々の申す

袖の春をいじりて思ひの妹々を我

妹々を舞人しりけり

中々は凡しとて思夕言のまの妹らもけり

言々

控大納言友家

夕言いりぬる夕のかり我にひるしとて思夕言のまは

中務卿祝

袖乃よりいすれいりる国のふわなひりし夕言

走明等も入る前控の家娘三々言々

百三三郎中目

右と申始行平

うらゝ〜思つ〜物め〜か〜とや娘の夕暮る〜いぬ

彦壁門地女

鳴りのこゑはいつかみおし〜と〜事〜志心娘の夕暮

也是は祝王家の千三郎

貞太后文太史後成

娘い〜我い〜身を爲す所を我を〜ね野原の虫もな〜鳴る

二百三郎中目

中務卿親王

な〜鳴おむ〜も〜のき〜と〜す〜つ〜と〜枕の泪う〜

天禄三年八月野原の千三郎のう〜

親子内親王家退馬

あ〜ら〜乃〜な〜る〜と〜し〜す〜の〜因〜よ〜み〜と〜我〜も〜鳴〜虫〜の〜素

百三三郎後成けり

衣笠麻内大老

夕〜我〜家〜吹〜中〜し〜す〜娘〜は〜よ〜も〜千〜三〜郎〜と〜す〜と〜も〜の〜と〜の〜系

娘の止言の中目

後鳥羽院出言

里のあ〜方〜と〜〜と〜の〜娘〜ん〜と〜月〜の〜〜と〜は〜え〜き〜と〜を〜

月を結んぞ

は〜三〜位〜抄〜取

お〜も〜す〜の〜し〜は〜わ〜ら〜と〜を〜思〜ひ〜す〜ん〜や〜と〜と〜は〜月〜を〜と〜ら〜と〜

文永二年八月十又夜の言有又未申月

太上天皇

其のうらみ雪もとのうらみ吹命に凡そ月内りくお祭
承久二年の裏より終月よりしをいりし
にアける
正二位知家

みくらのあかてるきよとんりのつらきとんりの
山月をよめる

とれし雪ありつらとんりくは夕山出る月をさるし
河内持政家百三十一月

後二位家隆

片くこのの鳥のおはあすつらきとんりくは夕山出る月

後鳥羽院にアける百三十一

入道太政大臣

まがふらけきのきつとんりくは夕山出る月
月をよめる
光後納言

くし

藤内大臣 基

わすれゆくつらとんりくは夕山出る月
後鳥羽院出る

その秋は月内りくは夕山出る月
後鳥羽院にアける時月をさるし

ぬけら

崇徳院少寄

是をこころし乃くこの思ひに我りるるに月のすまのあは
建保六年秋を月よりふしとて人々けりて
ゆりてけりてふし、順徳院少寄

心わくし素士のつて也とゆひしことよしを女の月いまだ
湖上月を 光明寺も入道前持政を教本

うづ海やくまじとみゆり鏡をきくすあらし代の月が
月百もきく、 前大納言忠良

いふ我りて女の用やとてあつ月のあつきの浦よる成さじと
海邊月こころしと 源師光

此乃国やゆきのとてさき月信をきくはかからぬ津白るみ
色好しく里月 女上天皇

里乃名も久しくあわし城のこりも遠くは輝のよれ月
建長二年八月言を月前凡

入道前をみたま

すむ月の氣もさしゆりて更らよたにけりて輝るる秋の上凡
はれさるる前用白家より

源後頼納末

あふけりてあつるをむじりてさうめしことよひの月を名をたに
文永二年八月十八日水言を月前凡

あまの床の海すのき花やうづ月のこころをうし

後京信實納札

あまの床の海すのき花やうづ月のこころをうし

何月と

午時直

あまの床の海すのき花やうづ月のこころをうし

歌一しす

大納言経信母

あまの床の海すのき花やうづ月のこころをうし

あまの床の海すのき花やうづ月のこころをうし

兼中納言定家

あまの床の海すのき花やうづ月のこころをうし

あまの床の海すのき花やうづ月のこころをうし

後京信實納札

あまの床の海すのき花やうづ月のこころをうし

あまの床の海すのき花やうづ月のこころをうし

後京信實納札

あまの床の海すのき花やうづ月のこころをうし

あまの床の海すのき花やうづ月のこころをうし

慈鎮大僧

あまの床の海すのき花やうづ月のこころをうし

建仁三年八月十八日

兼中納言定家

あまの床の海すのき花やうづ月のこころをうし

吹田ゆきくんとよすめさきうらるとはくはせ

夏京光俊納也

人をこころまきすはあきくもたはいつ思之秋のくは月

月事の中。

中務マ親也

人にぬじくらの宿は月乳もあこみぬは凡そちく

兼中納言定家

神はくハ枕のしにやとよとくともをら我忠輝はよの月

又十さきの中は見月

今上天皇

幾ちくつら我忠輝を思わすも老てう月もあうい

百さきうちうらへ月を

衣笠前内大夫

かみあはくこのまにさきね国にもたてまつるはよの月

光朝家も入道兼授政家輝三十さき

中納言為氏

輝乃よの月こそをけ我世中よ今もじうのころうら

け裏まきく十首言くまにけりはりうらへ月兼

草子を

依辰行家

我ちくわ草葉よ月のやうとよと神よ外のあをく色

崇徳院は内百さきうちうらける時

皇太后より更後成

居しけり此のそしにやして多し野原の月のすまじき

寛治二年百三十一野原を後休けり

麻大納言為山家

草乃京野りとの春よ宿りててよいづの月のおる

建保三年の裏の春の春よ

大納言通方

しづの月の入つて暮れありおむり末よりおる

光俊朝きんよ百三十一と休けり

正三位家

更ゆをいわけしえちからせしむるしあつる月いづる

月をりや

麻大納言為家

みづきに娘はまじりての春よしづる月れあつてはけり

歌しり

柿本人丸

よのらきよの女ゆれはえりよあ雲の月いづる

中納言家持

しづむれは更あつてむりしをゆりよしづる月いづる

文永二年八月十二日あつてはけり漸傾月を

麻大納言

あつてはけりしづる月いづる

糸織賢平

わさきを成更り氣のよかけとあこがれ月すむし

敬入月

々々天皇

五羽乃うらやうにほろよのまに入つてあつ月の面うを

歌しし

雅成親と

月のいろ柄かゆくあつて何事あること

さうのしし

續古今和歌集卷之第又

娘哥下

霧間朝麻とひししを後休ける

麻大納言為家

娘身乃切しにしよと妻こめてゆきぬと麻の鳴は

文永二年九月十日と麻の野麻を

々々天皇

福しれしと妻をちかこしと妻のゆきと麻の鳴は

用白左大臣

よさしなるがうの麻の娘はようくそを麻と妻をよ

左大光

悲しい事つらきことなり。此頃とわづらふものよめ系

前大納言賢季

あはれいふものわづらひぬれぬ麻の鳴る声

中納言為氏

あはれいふ野原の小薙うの娘よわづらぬぬ麻の鳴る声

巻山仙四より又その言講いふよ若いを

新虎井口伝

あはれいふ麻をあらうと娘のこころをきき鳴る声のあ

十首より合体よと麻を

古比門院小宰相

はれいふ事なりおし娘のまよふことよ麻と鳴る

麻をよめんろ 貫之

娘よこころをあらうと家い鳴る。此頃よわづらひぬれぬ

建保四年百高三の言日薙を

順徳院小宰相

ま城路よ志し心寂くあはれいふ事なり鳴る声のあ

歌しつ 舒明天皇小宰相

夕に我い文念のよは麻れをいふ事なりよめを

人丸

此ら乃娘の納けの務かゝれ事より麻の糸のよけ

十三年の事

後二位家隆

又乃け林の針よりの縫いよりの野麻の糸のよけ

麻糸何方よりよけ

後白河院出哥

し里の娘の糸よそわを糸のうらこととて麻の糸のよけ

千五百高の事

春儀雅行

いとよきとよけの糸のよけの事

弘長元年百三の麻を

前大納言為家

少翁の娘の糸のよけの事

糸のよけ

純友則

ちよきとよけの事

家七首の事

光明寺の事

三笠の月々の事

建保四年の事

前中納言為家

ちよきとよけの事

百三の事

秋のときあまもも麻のこころが小月いぢりあよみと思秋のそ
秋のこころよめる 平氣感

月乳も麻のこころも高砂は尾上の秋のむらじり
雅成親王

秋のこころもあまにけふよわやむらじりあよみ
かたけもそ指花はを

大納言行信

秋のこころもあまにけふよわやむらじりあよみ

秋のこころの中は

行信法師

秋のこころもあまにけふよわやむらじりあよみ

入道前をぬかた

秋のこころもあまにけふよわやむらじりあよみ

大宮院中納言

秋のこころもあまにけふよわやむらじりあよみ

純貫人

秋のこころもあまにけふよわやむらじりあよみ

暁后を

前ゆ久長基

秋のこころもあまにけふよわやむらじりあよみ

建保二年の裏の十又背のうき

辰二位家隆

乃大長きしゆらきつ切也し抑はしきき定の月を
名所持衣こいふしをよまるとぬける

古卯門院侍

源草下まのりるさうしとてねた昔馬守衣しりなり

承久元年の裏言名は同持衣

入道麻呂殿大夫

長きよのわろさうさふたつしよねためとさうくし衣は

ふ又百番言の名は 古卯門院大夫

浦凡下よさむらうしねねつわよの管下に衣しりなり

源具親納衣

こね人を縫しにりりの浦凡はき里小路の衣しりなり

海邊持衣こいふしをよまるとぬける

藤原隆博

同しをさうまると同ゆるし向のわき持持衣うらすは

名所持衣こいふしを

中務卿親

まらさちうき里小路の短凡はむすりと衣今アうつし

短言の中は 静仁は親

ちらうしめしきくおきしむ言しは同からうふよまるとぬける

藤原門院侍

うらやまのむすめは凡はいりたる多の女うつこ

長二位成實

今よりいさむのむすめは凡の吹はしきくつ女うつこ

よ家持女を 太上天皇

ふたりのこころる者のこころはわつうにそつ外まをこ

ナキ言有目因持女こころしを

順徳院中

娘凡にいさむね神たるこ物をこつ里よりつ女うつこ

名取百も言人へはりけつよさつるの里

のあそ

こころはむすめは凡の吹はしきくつ女うつこ

歌一守 蘇中納言定家

久し乃かじつお里のこ女をこつ月お多よりしを

九月十三日わりの浦より十も言淡はける

中に 蘇大納言為家

わつこつじりの吹をこつお多こつよさつる月お多

又元二年九月十三日お多お多の吹河よりつ言は

一は何月を 大納言通成

巻乃おれは凡に川るみおちりつちよの敷みは娘のこつ月

百も言有の申は 順徳院中

娘と乃よとの草衣やとわたりし月いまふはなれと云

月をよめる 素還法師

さき一乃入野の落衣り我ても枕さしと娘のよれ月

古も曉月こいふしと

源具氏納衣

かつこやこよりのちと娘の月あり成りて衣を社と連

娘のの中よ 後多野能也奇

ちこよとわたりしと久この天のしと有明の月

正治二年百三奇の中よ

後京極持政前衣の人衣

こつ月の有明の乳まかりとゆと娘のいとよをなふき也

もつこの日は月くゆすありけり衣のい

いと衣る衣を我り 赤染重門

もつ乃月いあしと日かり我けりとこの世の衣を

深衣のゆと 後京秀茂

きけい信ちと社ゆと我月乳の更つと世のうとあし

建保百三娘の 春儀雅行

世のわといととみとゆすり小野の沙茅衣とあし

歌しと子 録念右人衣

しとのちとあつと衣ぬと落衣り衣を社とあし

皇太后文太史後成女

うしろみく下柴久々にく娘蘇此處ち凡に鶉をくちり

娘三の中

用白麻左大老

吹凡とさうさじつと鶉をくちりのまの娘の文を我

森起法師

は草六のすうのつ茅芽に文凡さじつとつとつとや

建保四年の裏娘十三三の中

后二位家隆

る草や竹のしとつタキつとよんこうやねつとつ

行路務こつとつとつとつとつとつとつとつとつ

后二条院中

娘の節は様をさしつタ務のりつとつとつとつとつ

娘三の中

月花門院

すま乃わゆのしつとつとつとつとつとつとつとつ

弟

洪景舎女卿

娘務のしつとつとつとつとつとつとつとつとつ

文永二年八月をのこつとつとつとつとつとつとつ

あつとつとつとつとつとつとつとつとつとつ

太上天皇

産をいしつとつとつとつとつとつとつとつとつ

さうのうらやうはあつとわらうの言の後休け

々

用白麻丸大を

あをわしとらう思ひ何務のけこそとらうのふれ

歌——子

正三位知家

い〜ゆ〜よを月の名もて〜切るとと〜也〜の娘身

尹子ゆね玉賀屋の女ついでより〜ゆ〜けり

菊つよむよに〜を〜と〜をぬけ

直子院出守

ゆ〜ふぬ人の〜ち〜と思ひ〜ぬれ〜の白

延喜寺射の事宴三

後京後蔭初巻

初巻に司に〜は〜ぬれ〜と名〜とら〜け〜の白

晚凡念事〜し〜

白河院出守

夕言の凡ち〜と〜菊のゆも〜ゆ〜をい〜は

百〜ち〜の申よ ち脚門院出守

よ〜ゆ〜娘の口〜に〜こ〜と〜を〜の白

歌——子

中務卿親王

今よわ〜と〜は〜と〜娘凡〜と〜の白

持少佐初巻

娘乃多をいひ結まじとていふ所もあたらやうめとて思ひ

建永六年の巻に記すに又その巻に依り

日初め笑を 衣笠麻の大夫

此里にいし志く我言ふし文をふかすに又とね妻のよみらひ

心三位基雅

立田ししと我言ふとのとに下い何ようあつた事はあはれ

歌しし子 中納言為氏

あまそく廉く鳴なる声るひのいもとのあはれ笑すしと

寛治二年百三と杜經宗

入道麻の大夫

今より乃付るもあといふとていふにうひらめしむるの

あつたの 娘平申す

きのふふ志くるも女ゆら村をのり我らふにみら志也

中務の親王

しと我わし女ゆらえ小房鳴て多にくしの娘はひし

河地持政の家百三と三つと杜經宗

前入納言為家

くらやのつ入候のうすめ笑いとそのふにさうとて

文永二年九月十三日史言をよし杜經宗

今上天皇

外よりいへば我といふはさしづうへてらるゝのおまへ
番匠賢平

初内なるのまぢもまもあうさへんけうの下まから
後京先後納未

文をふりまてこいも志く我なみゆさ終るれまアゆさ
歌しし子 坂上郎女

こまの江乃としきのふいふにさ世阿弥のわえは海よけ
式八つ真楯

ま白野しし我ちりめあすまのいおまらさじさあはら
百三三の中よ 皇々后ま久美後成

雲しるす西に成てりめじし娘娘れお糸のまさうしじ
林葉樹愛こしらんをよとぬける

白河院出哥

しう京しるす板のけい我らみささいしよまらるは
紅葉をよ先ら 後京信實納未

みらゆまらちらういお糸くさのらうとれよそとが
丸を中將教良

ら心まにうにうひよをア河留りままの枯れ娘のお糸
内裏百三三は相同お糸

右を中將行平

朝より一々我てみゆり柄こころぬしの松のうへにゆりて
内院持ぬ家百そりよぬ糸

西園寺入道前左大臣

娘はまよとく我思ねとるのうらよとわさるのうへ

皇太后宮左大臣後成女

しる我よよのと同族のなをねよとてつてお糸の

前左大臣

はくよりゆりてゆりて我思のこころよとてお糸の

左大臣

下葉ゆりて家と^{お糸}お糸とてふちけりしうらゆりて

寛治二年百そりよぬ糸

左大臣権左大臣

家とて我よぬと是のよゆりて娘のお糸乃まよゆりて

辰之住通氏

はて今ゆりて後とてゆりてゆりてゆりてお糸の

建永三年九月十日言よ行改は紅糸を

藤原公能氏

ねとゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてお糸の

日吉社言合よ紅糸添雨

藤原中納言言家

惜りしと娘の母のわき田のゆきをきくしんかかひ

麻田大に基家百三の言よ

中納言

三田河もみらるる我てゆく娘のいひよらやだにひめ

百三三の申よ

入道麻太政大臣

うきうきに詔しひあろく言の娘のこみ成そるるよ

娘言して

麻大納言忠良

刈娘乃るれこみとこやうや早急を凡の吹みきすし

九月晝日ゆ裏こくこころ三の海きりけりよ

言娘菊

中納言為氏

刈娘乃こみこもて娘をきくしんかかひ

ふくまよふを休し百三三の申よ暮娘を

わが吹ふのまはれこのそよめこころに我てゆく娘のこみ

九月晝和雨のふつと休けり

中務卿親王

えと娘のわが我やおこしるまははひ

あめのしる

續古今和歌集卷第六

冬之哥

初冬の心を後休けり

全生忠孝

しのぶがくしを後とて飛つるもひげさより冬こび

皇太后宮大史後成

うらみもあうふげこの因ふもなとゆさひね後ちあは

土佐門院止三

玉座より雲の下車の道うめきこの人の後こみか路へト

百もあうけり

麻田大夫基

おみぎね用也春をうらみく袖よのこれち後しらほ

歌一十

鎌倉右大臣

娘いね凡日本紫の教果くくさひくろきよみは

中務卿親王

あまのわしいとねをしらと我袖の泪はゆりし切ふやん

源真氏納言

いにしへの袖の因ふよりのねとせにうりくも我をうらね

独因切ふとつらんを

後述大ちた大ト

袖也〜〜〜乃任乞の物付る印枕よき〜人とし

歌〜〜寸

藤原光俊納札

〜〜〜氏老うの杜れ何ふ〜〜〜に年命同之氣

讀人〜〜寸

わろ袖のり寸〜〜あれ〜〜秋月〜〜杜之と上〜

祝部成賢

〜田〜山〜木〜秋〜月〜杜〜

千五百番言合に

嘉陽門地越前

木架〜〜〜め〜〜〜夕〜〜何〜〜〜

歌〜〜寸

申納言家持

吹〜〜〜お〜〜〜お〜〜〜

百〜〜〜の〜〜〜け〜〜寸

後鳥羽院御尋

〜〜〜〜〜吹〜〜〜〜

前内大臣基家百言言

藤原伊長納札

梢〜〜〜ほ〜〜〜夕〜〜〜

建長元年十月三言言山家落葉

右兵衛督為教

葉乃戸〜〜〜〜葉木洞の外に袖〜〜

あまのうの申日

慈鎮人僧と

よい方ゆりしわなまの神也我て何なるや也鳴らう

百三十九年申日

後鳥羽院也

木葉ちるし田の枯れ初何句後より後をうふ人とかか

堀河院也付百三十九年乙未の初冬

藤原頼仲執事

其あらし乃あはれあま果て下卑るるもあはれ

歌一巻也

三木田延秀

紅葉のちるあはれしやあけつたわし吹也秋の枯

枇杷身も后宮

こふ人のわりのみみらぬあまをさうひよさうふ木枯の凡

躬恒

かり我れ紅葉あまのほけ我れ立田の何い園すとも

何落葉こころちるを

中納言考氏

凡しころほを水の志しふにや成候もそのころあま

京都前用白大井川はあがりて水邊紅葉こい

まを淡ゆけら 堀河たふれ

こふと川音日滝こまつし我れみまに紅葉の園もそる

承暦三年甲申道進日水邊紅葉を

大納言行信

尾中く一乃わろくはみらくとむとの庵まきく一説
承久二年十月光明寺に入道前持政大お何の
お榮み一御りけけりようふと我けり

順信院片寄

大井川よりみらけりしとむらきく我の記いさし

片寄

光明寺に入道前持政大お

紅葉い入江乃松よりわろく我の世れとゆこの花いみく

後鳥羽院片寄春日社の片寄

起し院入道前右大夫

庭乃おまよめくころいそく又紫して秋我の又い

文永二年二首号海一休一は庭落紫

前右大夫

庭れ中いぬみ一花い我の秋く又のよ彩よちろ又紫は

歌一と

平重内朝夫

本紫あしうわろく久このえを月と冬うい

よ史百鳥奇名れ

赤澤雅行

此ころ月といわくまらふたふ紫あし思来りて花

建保四年百そののあし

入道前々叔人夫

本業より名く成りし為にわづらひしとありてもきりては
内裏よりく二首言の薄きと我付けけりて夕陽紫
こりよきをよめり 皇后交々美師健

夕にけいさきとア思のまゝににむをのこしえちろお業
^{入道前} 通助は親と家又すきき言のよ切けるを

西園寺入道前々叔人夫

紅葉ちろしを朝日乃とまなりとて我くくうららの
歌——し

深にけいさきとア思のまゝににむをのこしえちろお業

三白三三の申し 中務卿親王

ちろとけいさきとア思のまゝににむをのこしえちろお業
百三三の申しはけるを

ちろとけいさきとア思のまゝににむをのこしえちろお業
後惠は師

ちろとけいさきとア思のまゝににむをのこしえちろお業
後惠は師

春の月夜抄

ちろとけいさきとア思のまゝににむをのこしえちろお業
歌——し 月花門院

こころのゆきの枝にまらけむる国をいひし袖をいひし
けけむと 麻内人夫 基

いふ身もいふり共なりとまらけむり斗のけむるありと
あーいーいけむとまらけむと

入道麻内人夫

すくもさゆのこゆわのわらへんえとすけてあけむる

百もろれ中一

最良信實納長

うーうー又思ひわつとてまらけむる八のけむるのえ

建保三年六月和言所名は陽内多と

後多野内多

うーうー又思ひわつとてまらけむる有明のよめむる

同四年に裏すまらけむる

糸織雅行

白妙の衣をさすまらけむるはつとまらけむる

冬尋の中よ

麻内人夫

たまいにけのよめむるまらけむるまらけむる

けむるいふと

中務の親と

凡そまらけむるまらけむるまらけむるまらけむる

寒草統残といふと

麻中納言家

吹月乃下す又葉の下りや花をさそそわをのき草
ゆえ百番う名のうこ

後京極持政前々叔父

花うにじり田は又葉をさそそふし花をさそそふら

花
古赤門地ちまう

いに花うと草のむらうとそそふし花をさそそふら

賀茂季保

路へいふ花をさそそふし花をさそそふら

後のもよむいふ花のゆりをさそ

大江足衛助夫

藤花うふし子うと花のさけぬ花うとそそわはけり

花うの中は 中務卿親

日ひけとす枯野のゆくと花をさそそふら

残菊を 持入納言殿朝

枯もそと後花へとや白うこのうらふ花をさそそふら

ゆらんを 延喜卿

ちり異くと花をさそそふら花をさそそふら

源順

うにりつと花をさそそふら花をさそそふら

百番うの中は 藤ゆ久基

鳴ゆる袖の邊をこひうらむと一羽のよりの様は
み鳥をよもいとぬける

古片門地止り

夕暮の浦とこちよひのさうりりるわよの袖を

伯千鳥を 中務つ親日

浪のしら磯のうらむと花とひすむのさ

境み鳥を 夏原光俊朝夫

暮る我のよの野の境凡とて入るかさむとみ鳥

歌一十 大納言通方

らこの糸ゆく我のゆら境凡とてうさむとみ鳥

小弁

うらむとひにらむとみ鳥のよ鳥鳴き更よけ

女百毒三の言と 雑草法師

ふらむとわの海み鳥友ゆらとよの月

光明寺も入道前持ぬ家の百をわ

淡ゆける 衣笠前ゆ久ト

橋とてつよこのあけのちよみ鳥をよらむと月

歌一十 夏原基成

いとゆらやららに月如氣とてさむとみ鳥

用白麻丸大た家百そ日

休庵新家

あはれなるこのにら神としてあふの月よあまの思ふ

正治二年百三十一 二品中亮は親と

かくれぬしあはれなくゆゑに乳懐く月と志くを村をねえ

歌一十 順徳院也

あふのよのそわな月とあふの思ふはつとらかづこの橋

百三十一の言

あらのく大野田のおけみささき波凡しくいがる月乳

歌一十 大納言好信

そらふにやうに月とあふの思ふはつとらかづこの橋

あふの思ふはつとらかづこの橋

あらのく大野田のおけみささき波凡しくいがる月乳

歌一十 真昭法師

あらのく大野田のおけみささき波凡しくいがる月乳

水島を 式子ゆ祝と

あらのく大野田のおけみささき波凡しくいがる月乳

清慎ら家の屏風は 中務

あらのく大野田のおけみささき波凡しくいがる月乳

江雲寒不散こころを

用白麻丸大を

らるくこ磯乃浦ちりさうこさきんが我が雲たのむは
物を淡休けり 持大納言歌初

きくれいすく入江のこまの世は凡さじしつらわは
氷田あきまきりしを

皇太后文更後成

きくまの氷の名をうとく是もあしきとすし思は
歌しす 中納言

あゆむと世のあはれ水はしきしきしきしきしきし
道東院止り

家のすきり合しあけりしはあ事あこりし
ししを 後京極持政麻を政人ト

は水をいた瓦の吹もきてこが我が祖のこりしき
貞永元年百そり淡休けりしを

光明寺も入念前持政人ト

さく花ぬき花凡はあすの月せ風のよしこらと果る
はかき海すしああけら春日社十二そよ先
哥 大納言良教

園まこりさきあさしりあすの月かりてははの香は
とそり海しはし次は何物と

後を御代になりける百三十一

光明寺も入所前抄取た久ト

この世に人の心よりよき世に廻りの雪はあつ

歌一十

そはね忠

冬より野なるわよなわをなまらるるはこも雪はあつ

後世もたれた家すまは田中雪を

皇太后文太史後成

降るあえな西川雪は縁じをつやこころいれはるる

寂勝曰天王沈の障子よ

前中納言定家

そとに雪や春のこころは吹くはつとわたりしは雪の心

正治の百三十一

も是は初

程波人わあはあははは雪のこころははははは

は下良守徳野女を三つしてすめあはけり

雪を

為家孝宗初也

みく島のやいへる雪のこころはははははははははは

歌一十

平兼盛初也

るる雪のこころはははははははははははははははは

寛治二年百三十一換雪

平兼盛親

るるるる野の雪の音なるをききし今も昔の夜もみるる
はち元年の雪の中

文筆麻ゆ久夫

天の原平らなるをきく雪の音のいづしとるるの
雪の音

後徳大寺久夫

久く雪の音をきく雪の音のいづしとるるの
河津栲女家の百三三

後京信實朝

雪の音なるをきく雪の音のいづしとるるの
雪の音なるをきく雪の音のいづしとるるの

雪の音なるをきく雪の音のいづしとるるの

後徳大寺入道麻田の家

皇太后の御成

雪の音なるをきく雪の音のいづしとるるの

雪の音の中

二位家隆

雪の音なるをきく雪の音のいづしとるるの

はち元年の雪の中

麻大納言為家

雪の音なるをきく雪の音のいづしとるるの

後京栲女家詩 雪の中 栲樹

后二位家隆

因事一わりの言にいとれて雪もそとひく事なれ
百三三の中よ 慈鎮人信と

けこみ我雪とにわりの浦をたつとほねこの波よんか
日台社よちりける事今よ雪を

后三位家

月影乃よりこし程にわりける尾上の松は雪のまを
寛元二年大嘗會ま基方女工所よみ
ゆふちりてける雪のふる日いつりける

前右大臣

九月はうらぶのいっやんかきつとまをいり雪は
冬月又昔の言よとぬけるよ

后鳥羽院女御

馬我めやまねうらひちまをしめの神を月よみよ
豊明節會をよとぬける

今上御

雪はうらぶのわりの月よとて雪をよとぬける
前大納言實季

くわわの豊の切のりやを草にいまの代よあをり
寛元二年十一月東三条神樂のよにり

今上天皇

白雪乃ちありしに、
如

去る雪のありしに、
はち二年毎に、
と休しよ

麻田白丸大夫

及しわれいありしに、
冬より、
麻大納言為家

貫之

去る雪のありしに、
春ちりりありしに、
炭竈を
身太右衛門史俊成

小野とやをくすみ、
歌しよ

麻老の職教長

去る雪のありしに、
去る門ゆりた家三つ、
二条の貫成

わしは乃ちありしに、
果を言はしよ

麻中納言為家

ふしりる今ら、
ふしりる今ら

年のく我よまよふけり

皇を后爰ち史後成

いとせに訓しよりうるとれんちしきくうらあまを

あまよみろハ

續古今和歌集卷第七

神祇章

わ我あのみ人の祓ひを思ひきしうせよあまこのけい
あ我の指荷の大初祓のちうこをし

我をー我釋也年后伴のせあまくうけし月は世を思ふ

こ我の春日大初祓のちうこをし

撫子乃しとこしこしとらりら我のく人かして思ひいん
竹のよし我世しこまよをうをくらひしよまをけり
松ゆまのあもくはしうめじしうまのあまをいんか

此三首ハ初野の神章こをし

寛治元年九月十日今日社頭祝

皇太后宮大夫師健

社見やいすの何のいふやうに世の波の音うのひき

建仁元年又十三日今日

嘉陽門地越前

社さしつわん社いぐ世と成也と流よる社さつわん社

大納言通方よりを休ける清水言今日社

月とあまをよめる 卜部兼直

久しき月のかつの社こしつげと社いあつか言

正治二年七月言今日水邊月

後鳥羽院言

る清水すけの月の光もいりの社をみる地す

朱雀院に付る清水の院付をみる

そいれりともいふとめと社けり

純貫く

松とあいまると若むする清水の社をみる

八幡とともいふとめ

本と天皇

石清水より社あしりいふとめいれ社すいあつ

る清水後番言今日社懐を

秋祇方の中より 意又田也成

新をこゝ我兼ししのゆゑはありの代に秋うきるは

光明寺も入道前持政家言合よ名所月

友系信實朝夫

そふ山尾上の松の枝凡は秋代と名わりくすうる月乳

平野祐言合よ 二位源隆

難波津にきこしあきし花前我平野の松もあはる白雪

雪乃わくく平野まはるくはあはくは秋代け

入道前持政大夫

林より葉おこるのこつくとははるをうらふ雪の白ゆ

二十三年春よと秋ける中よ

祝部忠成

世をいのつと秋をいあらし秋垣は我を去る年うはけ

秋しす 賀茂氏久

春をわらうと秋しし乃秋のき二んをきりしあ

遣名使ししゆり後とこいふけるは春日の紫

春日後付け 春儀清和

春日野よいし三宮の梅花ときしゆてやうつとるま

後一条院春日行幸日上東門地(ち)あけ

法成寺入道前持政大夫

うらふらふらとて春日野の川を流るる
百三十四年中に入道前を改大を

ふすの秋のふきくわいふのうらふらふらとて
春日社を留るるよきゆけり

春日ふむじくうまの言ふて又ふらふの月日故にうら
建保三年百三十四年中の申すのうらふらふの
とみかいてうらふらとぬけり

順徳元年

春日野のうらふらふの言ふて又ふらふの月日故にうら
百三十四年中の申すのうらふらとぬけり

後京極坊の藤を改大を

後京極坊の藤を改大を
後京極坊の藤を改大を
は京極坊

ふらふらとて春日野の川を流るる
百三十四年中に入道前を改大を

ふらふらとて春日野の川を流るる
百三十四年中に入道前を改大を

ふらふらとて春日野の川を流るる
百三十四年中に入道前を改大を

位より乃神如と云ふのゆゑすこふよものかみすとも

建保三年六月二日和言所言今日松経年

衣笠麻ゆ久夫

位吉のきつこのこしと神さといふうの世ととて思ねれ又ハ

建也又年位ねはよ極後の日

麻左政久夫

くも又うううよみ年を改るし昔よりる位吉ねはに

位吉社の遷し宮の後ら留のよまうてては

にわくにかの社と改てせりうう

とて天皇

秋よりと信すみよりこみうなりと我世よめじら交ねあり

く田のけちかー

熊野けせうじにらに枚舟の(な)みよ神の思れはけら小

くらのな留くはけるけりのくうてを改

人を後一後きりめあうしを思いにしきく後

はける 入道麻左政久夫

と熊野の林くうのぶいふのうと果くと信いのうふ

人のうのうくはのうのうのうけ

武乾門地出連

ふちのうのうに落ふ庵にまよまうくんちちりてあじ

續古今和評集卷之第八

釋教序

法華經廿八品の中より方便品

傳教大師

この何れにのほごちらむか金利弗のころに後記

法師品

この法をめぐりしとく人よむと佛乃にいふこと

分別功德品

わの命をうごきつてよらんこと人いさむるにこそなり

藥草喻品のあらうを

慈覺大師

まゝとくちあるわのひた枝のこゝれよのつとく

維摩經此身如氷泡のこゝれしを

赤染毒門

るちれい庭にうらうとくみ久しとく思わつたかみ

此力如夏

前大納言云

常ちぬ我身に夏は甲いづとわしをみよし

是心も仏の心を

信於源信

よしすつ佛の道とすし我に我んうらむる心

鐘のをこけきつて

あつらひる乃鏡のいふこころはけきもこころよの切や
覚者何還狀夢中事

持大内言教家

しきく思ひ佛の世をいふ人のこめわちあり
平常は是道

ゆき佛の道をめじ世にうよの常れんをのけさ
若離我執忽地昇大我

い

定時法師

りる月あつらひる乃鏡のいふこころはけきもこころよの切や

隆時法師

こころあつらひる乃鏡のいふこころはけきもこころよの切や
大日経の十掬せし句をいふは後かけるよ水月と

克俊納未

うらやまをいふ乃鏡のいふこころはけきもこころよの切や
母衣片禪觀水月

古所門地片寺

じよの月人の水もよまの志にうらやまをいふは後かけるよ水月
月の衣片禪のいふこころは

たよ天身

世のまは人としてとせや留りていぬしちりふる月の
神カ只是二音を遍至十方の心を

はる行を

結しぬる勢をさねのりしとす只二をう言ふに

七十二景説は花の心を後ゆけ

大徳と隆并

七十乃をながうてさうやほの長はむの

釋教の心を 平時廣

勢の上じりの考をけれし即ほの花を成むいなり

心しす 麻布白丸大老

りあようゆかまうなりけらん花はちりけれ

はち元年六月飛山の仙洞より如は実如

体一時十種供養の散花辰一信貞子調

てぢりしと花

入道麻右大臣

りしをく候こらほは花ちりの末向く候

甲は洞よりくみして如は実如か一時普賢

大士兼白兼象爰の心をよみ候

持入僧都憲實

みる爰乃面をゆくうしきこら川のる月の

二會の禮を思ひてよとゆける

法下良覚

くしんくもこぼつとのこちや乞鉢賜はるる我と十
熾盛乞はをこちいゆける時思ひにけり

麻控僧正成源

うまごや一ははの水ぬれまよしのふいあを名をるる時
一切経一返みりつこより思くらふるおわにた千
巻よ及けれいこのこつといそつ余のうらにちし
思ひにゆきよとゆける

衣笠前内入木

じうらゆく余をう思ふはの水ぬれまよしのふいあを名をるる時

歌一十

後鳥羽院出言

いふるよるふ海より流と水ぬれまよしのふいあを名をるる時

浄名居士を

景徳院出言

ほくふふ人なりわをいふとてふ井の水ぬれまよしのふいあを名をるる時

天台大師を

中務卿親王

もなきくおれ泉のまよわや水ぬれまよしのふいあを名をるる時

釋教のうの中よ

世をおさ先馬をこつとくらんをアとて水ぬれまよしのふいあを名をるる時

かこつとみらりやちける人をなぐ

後京道信納卜

みろのよまにさうさうとてはる小園ははれさなるを
教是佛語禪氣佛心還有淺深吾に因て
休ける人の也すす

思順上人

世にいひてさひのけるを章も思ふ我にいと我にあり
心觀の文此即教而案のんを

そしにけり多し中しくし里のさひさるる々々何なり
僧に信意の階も別きに居く初て三十三階を
こちの休ける龍岡の雪のあつてけるも返りて

休けるよ程儀のいさこちけり増年法師
みとれうらくえいりるるもあけ我にいわ
ふのうに書て出休ける

貞慶上人

古なるうーしと白雪のちるる道こうたもそれ
高野はほくく休けるはおくの地

入道前右政人未

世を捨てすよれ世方こころをけれくるよれ法をみぬ
十波の家れ中の檀波の家れんを

後京極持政前右政人未

うらみも捨ちしを縁し思ひのちよき女の事
無量壽経四十八願を讀みけり供養読佛

證惠上人

多のむね白ひを切しよと佛の向にけり

樹説若きえこふを 大信正隆并

んやこころ木とはをくみ我いもとこをさうせし

花の茎に極樂を親とて後おひく

むし花の三つ

あさよちろ花みきこにもををさうけり又思ひ花や

厭昔縁はんを 道然上人

いよつと世のしりやきさとうさ力より花界のつと我

えしとす 天台座主隆覚

まごつと世の愛をうけりこの現るにやゆり

大不経畢竟空寂

友系清補納卜

何しとむらぶるに同物をさめ思ふるよ歌に

未得真覺恒處夢中故佛説為生死長

夜のんを 法下長惠

ちよの愛はうらにむ縁し思ひにちちういの場のを

的定を杖敷よよとてより先

僧都源信

くみむけり約ありと結りしけれ佛の道よりわつこつとも用

清涼ちよも後々 宗蓮法師

惣のうらまひをの移りゆくありの處より有次如月

龜山の山田の持佛堂信養良は下野を

導師より〜女郎也の枝に美抱子の念珠

をけり〜布衣の娘なり〜していをはり

ちと天身

名よち〜このの娘の女郎も乞を美抱の慈心とす

念珠を束束して胡よ如家法よまに〜り〜を

けり〜をみ〜

慈心と信正

夏迄〜〜ら〜ら〜をけり〜みれい玉のを

あ〜〜師いあせ

とちくつとわいみきりしと別は人命とてまよわぬ
如し
人言ふ或高き

ちの代のりつたにみりる様を我は行くとつていふのち京
後京保昌朝下丹後よりわくとつとけり
和泉或部思ひとつとつていふとけり

中納言定頼

ゆきゆきはきりゆりしとていふよむとつていふのち
大慶二年正月賜辰之尾高布丸也門よ成て
とつとけりよと輪川のりつとつていふと
後休けり
柿本丸

とく我わく我やいひし春氣ゆめりしとていふ
身子院宮の滝御流しとつていふとつていふ
よめしとつていふ我わのまらしとつていふ
のちよゆりつとつていふ日わの我わしとつていふ
よめしとつていふ後休けり

源兼

わつとつていふの別を思ふとつていふとつていふ
東のつとつていふとつていふとつていふ

躬恒

とつとつていふとつていふとつていふとつていふ

純貫とて義康の寸けりてく田の我つとけるなり
の我れりてくよめり

一日にいひまゝにさるるのよきまゝにさるる也
又月五日藤原宣雅朝を常陸公とて下つ
ける所左大臣將濟時の馬如儀しうかぎに依けるよめり
をさるる
大中元年宣雅朝末

あつち草々たりてりつちの我れはよ人の思ひごと
わ(田)りりける人の許りらるるよに依ける
りける

よよ思ふ人をさるるさるるの思ひに依ける

核のよちちり人のよしとよめり我つとけるよ
めり
純貫とて

おみじつりて人をみる所は我同とてあつちと
女卿徹子女に伊勢とて依ける所

是道子内親也

娘務乃ちりてりてと依けるよめり
女卿徹子女也

よよのよめり娘務乃ちりてりてと依けるよ
儀月とてのよめり依けるよに依ける

一条院皇后文

雲の原よりとみまのまへつてわひとこのころは

大納言経信にけりしとくさうとける時後頼朝を

こよよゆりあけれかたのやまにきくつと

しける 堀河院中官と伝

別まをいおふにりなをとりかたの思ひさうく娘は書か

ぬしるぬと 源重盛女

馬より我方るあをい別路に命あうしといとては

殷富門院大納言

つとまをわすをゆりつて我方のうさうつとて別やう

饒別のんを 前大納言為家

ゆりい又わあうししあめたわの穴い鳥は書うる建

又承元年九月丹宮群行れとてあ地あ

ぢりして 月花門院

わうしとまもしあれ一人志れすうふる思いのうとて

甲群れの長奉平送使りくゆりうとて

つとまうの雫女房の中(に)りける

授中納言長雅

ふれきとわう道の袷衣あより外は袖で思れを

登道は師遠所(ゆり)けるよきわにり

らに 三三位頼政

恨われ我がうらみ松衣くし日すけかかむるれを
兼感すうらみ松衣くし日すけかかむるれを

清原元補

志しつとて田子浦浪神をらるるの別よりるゆは
堀川氏のち村百三言ちけりよ別のんを

後原仲納長

世つら命と志しつとて別也る人を結つてまねを
ゆらんとよめる

源孝行

ゆのたごともつを恨の別路いぬ思命は福なり
景徳成百三言ちよ

後原清補納長

れまをいしつとて別路いぬ思命は福なり

歌いぬ

藤原隆信納長

思いぬとてゆらみらめしつとて別路いぬ思命は福なり

東にゆりけり人を送つて逢坂よりる

源後頼朝

あつとて名をねとて相坂の用いぬ思命は福なり

逢坂上人よりこしつとて逢坂よりる

后二位家隆

逢坂上人よりこしつとて逢坂よりる

ね

逢坂上人

まじりてはすまうもいふの心は我なりそふしの心は
あけける女のしりくへあけける

辰三佐野能

くみしちちうね月ちるるをうあふえに信ふふか

あけけるあけけるのきんはあけけるあけける

つりける 伊勢大唄

こころしめりおのよれきわく我をわを備にふか

あけけるあけける 祝戸原仲

あけけるあけけるのきんはあけけるあけける

あけけるあけけるあけけるあけけるあけける

惠慶法師

わろれこのをさう人にあけける鏡年月布しと思はるれ

あけけるあけけるあけけるあけけるあけける

祐盛法師

うへくうんあけける何の又な成わの我路を歌くるるは

あけけるあけけるあけけるあけけるあけける

麻中納言良房

まわきの月よんはくこあけけるあけけるあけけるあけける

あけけるあけけるあけけるあけけるあけけるあけける

あけけるあけけるあけけるあけけるあけけるあけける

くちやうくつてもしにる春をあもれね思ひ

三三三三三

續古今和歌集卷第十

羈旅奇

羈中らとこまを 中務卿親王

雲の舟ふじの末れにけし松をたけてけ道うもたけだ

棧の心を

志れすく清みの用れ浪西よありもまきみきくさの海松

百三三三三 中納言為氏

ね志りみくこやゆえ言師山麓にめくら浦のまつ系

十の幾はのしをよめしてよめろ

人丸

志し鳥乃踏坂山のねりきにかしつとてむいしよと更はち
持統天皇吉野宮よりみりこしぬける時よみ
休けり
佐保丸大夫

うらふ山朝風さむしぬめくくつとつふいもわらぬ
歌しぬす
大江嘉言

ふみきちつこころを故郷よいにこも志して縁や信し
旅の心を
貞慶上人

栴にみくからゆり古まをうまごころつと思ひてふれ
源道濟

あふみうしこしきけむ古まはうくつ何のちうらむ
旅ねるよくよめり
平春村朝長

道しを乃らのう系ねれてゆこまの身じ二しよま
交旅こりよしをよと休けり
赤根雅行

あふしをみしてね夏のうるふいふりねとるこよの中
歌しぬ
前大納言伴平

波くる野りゆりさきと神思れくおもるてふ心あつよ
津の國すよこりし心と休ける時淡休けり

中納言行平

あふしに波あしくるあはけき用欣こゆるすよと浦の也

後京極持政家の十三年名は娘の格を

宗蓮法師

逢坂をちかむにそね娘はよすおこころ思へし川の舟
福京の都にまゝりけるふしを田こり人あましく古
まを思ふこころ人のししはつりける

左京大夫脩範

思ひて我を田のまゝり娘はよ故郷ふるよふのまを

歌一十 人麿

うしろのくらつとをけしちてこのころは思ひにけるから
都のりつとく二じしをこけるよあめ

前右大臣持朝

ようよふ小藤うへの白衣をこしにいくる二じしの一
河内持政家百三三

深壁門院女御

かきけしその藤衣いよ又わがわが様の袖あしき
修りの名しとくよふはける

法下良守

伊と鳩やわくく又田の浦にそん地の海をそしる月が
善光ちにまゝくける舟を捨山の藤よやこめて

淡休ける 前大僧正光忠

こよいし我をいすくくの禁にく月終るに流りたるき

橋のうの中よ 中細言為氏

いざ野や夕さくく我くみくことぬのいよ月そいよふ
東よゆつとける付も西の橋おやつとめく月
いるちかけけみさ

平政村朝夫

ぬうし夕さくく我く禁なるるの橋を月よみふれ
入道二お通助祝と家又すきと野徑月

正三屋と家

しう野はたまをくぬしけきこしうみけふたの月

橋の止うの中よ 後色好地はう

くふ又雲の流より出よせつときのの言おのとも月
又十とすのちうける時橋白月

皇々后文と支後殿女

袖のくは思ろくふちるる光水月こう橋のちうとつと我

早宗池地よちうける百とと橋哥

徳賢門池堀川

古卿よ印とせわぬ月をこい橋のうをマおとひうこ

申勢マ祝との家おの合よ

克俊朝夫

月をみかきしとてきくし國しちし古くおきしとて
後堀河地出付し人のそのこと月前後し
を後休けりよ
前入納言賢季

都をいひのいづくはつておきくものすその月をさる
娘の比人よさるうたておのりし

橋忠幹

みちよわつて我よの月引いよ里のしちこゆし
養化^{いんけい}よちわつてつて月のわつてけり
よ免ら
左京大夫源頼朝
つてし都のしとてつてよ雲れようしとてつて月か

極宿月也

行人念法師

極のすす神もよかのまうめて草葉にあまる月をさる
一
高天原二年百三十三の野月

後原隆祐納卜

かろもかくわら野のしとてわねねし移し我れ月をさる
野宿月とてよを
麻中納言定家

夕房れ為八月をわつてしとてつて野への極人
建暦二年詠奇言よ三輪中眺と

三二位家隆

つてこれ用れしとてわねねし月とてつてつて

入道二小道助親之家五子その海松を

参議雅行

乳に片神いふとぬの我うふ月うまよすし虫明れき

松の三つ申又 鎌倉右大夫

松おするいせぬ債疾なるうしすう松おやうら月乳

前大納言為家

わの鳩のふのきうふくくくくくくくくくくくくくくく

私考所くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

いんくくく 皇太后又大夫後成

船とひらわりの月のを切は浦よりをらのくくくくく

こそくく海ゆくく 申官大夫雅忠

松くくく松の草又よわくくくくくくくくくくくく

一 後京松持の家十くくくくく

二 后家隆

古卵にわの我神といつをくくくくく松の松はくく

松くくく 松本八丸

草松おひくわ松松松松松松松松松松松松松松松

真子松のあくくくくくくくくくくくくくくく

目くく 素性法師

面ちくく松松のくくくくくくくくくくくくくくく

とらこーよわてはけるお娘の凡そ
けつ夕日奉るのこつこはるまうけつ母の
思くよ免る
拾得の草画

とらこーの指とさへ一日おもしろ
伊勢ま〜九月りり内白の〜けつ。

女脚徽子女王

煉とく我意いとまよ〜胸よりの海白うらな
式乾門地弁ま〜いまよ〜うらなける
を思て後かける
式乾門地七運
都て〜いし風ら〜うら〜鈴廉け昔にま我と〜いし

建保四年百三十一

僧正行意

女あぶ夕凡さ〜志の系〜とら〜の口宿ら〜
歌〜し〜子
夏京秀彦

都お〜り〜子〜い〜あ〜は〜成〜け〜ま〜ま〜て〜こ〜じ〜こ〜何〜の〜用
海路河を
皇々后交々史後成

神お〜ま〜を〜一〜回〜の〜秘〜の〜こ〜ま〜あ〜れ〜た〜し〜じ〜に〜内〜白〜を〜
建保三年内裏七三の合はま〜夕様

二位家隆

う〜ら〜ら〜と〜の〜中〜に〜あ〜る〜は〜ま〜あ〜の〜お〜と〜は〜

麻中納言の家

引ひかへ草葉と表のちの御はらう日ししをさうか
正治百三三の中、式子日記

数多の野路のうす京中といく文よ都を愛しうす
二冬所漬成

お島崎うかの何れかのみく返りけり一むあの子
十三年清一は一時用路雪を

後京之後納言

娘はくちのきぬよ雪をもしうこむありの
あけはよこつてはけり時様をわきよ

後三位行儀

何くちてやみり白河の用はあつたまふの海
百首はうの中も用路を

太中門成り

鳥の多にたはつたをのちを我のつては人足柄の用
大書ししよみはけり

信正行意

あまのつらよのちのつては信正のまは松尾
麻人信正通慶

雪うるきのを道ちみくつてわくこわいむあ

修好にいにらくよきけり

持律師教雅

いんごうのうまはたきやうえうのわらわら

後多好地は名所をけり

赤澤雅行

多きふしじうのあつじのふれしきわつて下道

人實元年十月天身紀伊國より

けり

よき人

夏代のみこととゆい白妙のつづき

歌

くろくは海くろあつみの海のつら

そとてりちのうらとてりちのうら

前日大基

是れうらまのうらまのうらまのうらま

山様

麻丸無法持教

ちりちりちりちりちりちりちりちり

建仁三年和言一風

りん

西園寺入道

善くして我よりよきこと

各所より

後鳥羽院下野

あまのこころからね^ん名の幾日は成^れわじ^うの^と系

様の心を後休多 夏系信實納札

あまのこころね野系^の末^に夕^にけい^のき^りき^くあ^うい^ふあ^うい^ふあ^うい^ふ

中務卿親

いふに^も移^るま^をと^し守^らん^草枕^わと^しや^あの^この^中ら

は^らく^しま^くと^けり^の射^すの^しま^あい^ふ

大宰人戴高妻

浦^凡よ^の男^の心^をい^はけ^れも^流の^よる^社祓^まさ^う納^札

河津橋^の家^百も^も様

藤原信實納札

塩^凡よ^の心^をい^はけ^れも^流の^よる^社祓^まさ^う納^札

様の心を

後法^惟ち^入道^前用^白衣^下

あまのこころね野系^の末^に夕^にけい^のき^りき^くあ^うい^ふあ^うい^ふあ^うい^ふ

よみ人

様^あの^この^心を^いは^けれ^も流^のよ^る社^祓ま^さう^納札

中納言家持

あまのこころね野系^の末^に夕^にけい^のき^りき^くあ^うい^ふあ^うい^ふあ^うい^ふ

よみ人

凡^吹の^心を^いは^けれ^も流^のよ^る社^祓ま^さう^納札

海路日言こいふんを

前用白丸久未

たまはるゆりいづくらの京まの浪ちよ日の言よけり

海路を

平長村

舟人のごまういんちんもやうくしよわねはる人ふ

歌一巻了

夏系基改

船よりふのけよ日の言わよもすまはははの京

思ふしゆけるは又平度整朝をまよふこ

乃國にまうれあけるよんちかごもあひて

ちるみの浦をまぐくく浪休ける

安嘉門院右車門佐

こころむまいつらちみのうら我思ふくまははこころは

鳴海ちにくりこいを休ける

藤原光俊納長

あも我ちり何こちちみのくを我のちあひて浦けり

こ百首の言ち申日都島を

今上天皇

都島ちよくくおもふ人あつとやるをいんこころ我

んち二年ちり百首の中は何を

中務つ親と

此里すうしんは京も程をすいりたる島に都ごらま

百三十一 後の心を 通周法師

思ふ人わつしう(いひ)の島きつとまらぬまのこころ

歌~~~~~ 田京天皇のう

ゆきやめの袖吹くすあすの凡都をまといひつゝ吹

にけりすり乃ふとける舟都ちくちあは淡休

けり 大納言様人

都なるわれゆる宿に到つとよの後はあつとまらぬ

後はれちへ道兼用白の右人たよ休ける舟ま

百三十二 皇太后文太史後成

みつゆよまぐこむねつ海と都の外わそりやう

歌~~~~~ 後京隆祐朝臣

くふは成都とちりう邊坂北舟のわろこよまらぬ

朝中晩凡こまこまをよみとれける

古所門院のう

吹凡乃あはぬるを都さ志のふとやう夕暮まを

様行の心を

白平をえたる物し思ひいひあつとあはぬ

三十一 乙亥年

續古今和歌集卷第十一

戀歌一

歌一巻丁

業平朝夫

君よすの思ひやうむね世中の人の心我より恋いし

延喜十三年春子成言合に

熊恒

流よりかおのいさるらんごきね人のつらさ

恋乃奇して

素性法師

みね人ぞ心むしよむしむしおのこもよむし

前中納言定家

恨みくゆさみね人のきこひしつらさく改つを乞

和言所よりくさき言合依けりよ初志

赤坂雅行

くふよつや人よんをとおに流るるもよむね袖ぬは

右大良の竹の百もよ印んを

後は性寺入道藤原白兼下

いかりしる恋路いまやまをくしるるさつちあわ

凡も元年百も言よ

入道藤原友家

まらもくはゆさるるわさ田の袖よまのつらさを

初彦のくそ

古歩門能止奇

紅乃うめのこわもあましくんのくそをよきまじりて

扱と是則

く我をわ乃くまよりにてしにむのくそ大國のちろくこころあり

前大納言忠良

男よすりぬしにちりくはてんやんかまじりてさるる

之羽男よち入道前持家忠十郎のちり合よ

一宮の衣忠 後堀河院民又典侍

山姫のうす忠衣しく我をわ乃くまよりにてしにむのくそ

建仁元年十二月和号元亨の合よ

前大納言隆房

小志がよしあまのちりやあはて師出わさるるまよりに

内大長の竹百そよ名所忠

之羽男よち入道前持家忠十郎

いづのまじ神より外にもちの下の草のまじりてさるる

忠實切表

まあしに門我の侍にうしにちりてみとるるまよりに

山家法院百そよちりけり

皇令后文大文後成

いづのまじりてさるるまよりにてしにむのくそ

歌しぬま

前大納言忠良

とくしのこもつとらすうらるふいぢうらのうと我ふ

人形つと家

下萩のうとこころわしぬ家計もしもじる娘の初は

後系叔行初也

人んまこことし我ふこぢうしううと雪おうらこぢも

建也二年前令は忠意の人を

前右大臣

あつて人んがらふ方ふのいづくにけしとまら洞ふ

人んはうらうとけしう百もすのわ中

中務卿親

みらるくの思ひのぢうふにうらかたもとぢう思ふを

忠意の人を

いそ思ふ人の多を人んうらあさやとまじふるこも花

とくふのきむりこころあけ我程波分りこの思ひも思ふを

新法前令は寄始忠意

右と天身

思ふとらうらあさやとまじ我あり思ひ娘のこにせらあを

忠のゆきの中

後系叔行初也

よこしとこころわしぬ家計もしもじる娘の初は
人んまこことし我ふこぢうしううと雪おうらこぢも
建也二年前令は忠意の人を
前右大臣
あつて人んがらふ方ふのいづくにけしとまら洞ふ
人んはうらうとけしう百もすのわ中
中務卿親
みらるくの思ひのぢうふにうらかたもとぢう思ふを
忠意の人を
いそ思ふ人の多を人んうらあさやとまじふるこも花
とくふのきむりこころあけ我程波分りこの思ひも思ふを
新法前令は寄始忠意
右と天身
思ふとらうらあさやとまじ我あり思ひ娘のこにせらあを
忠のゆきの中
後系叔行初也
よこしとこころわしぬ家計もしもじる娘の初は

元禄元年百三十一の初迄

前内大臣 喜

何れよしのちふれなく〜めいろうめしきりしにさよふとと
宗麻直とらつらんを

鎌倉右大夫

娘のくに朝音かゝれ多々麻のふのこのまや因らさるを

歌〜

右内門督兼祐

人志我寸思入心は娘もこの志くはれ又は出思つるふ
百三十一の中より宗凡直

右近中将経平

ちろ〜ちろ喜にら〜因娘凡のまう〜しりり思入らんを

思ひころ人のま〜につらん

謙徳云

あうやかく思ひらる〜花落いりなる野へふみ〜

前内大臣 喜 家百三十一の合々

持大内言取朝

ま〜ふの面を〜何〜も何の〜ら〜

河内掾家百三十一の忠直を

藤原右内大臣

思ひはのち〜まう〜そよふの月く〜ら〜い〜らん〜人〜

我袖の松の葉をちる故草ゆかりに我をいふよのこころ

歌一しよ

及原光俊納卜

枯らさず草の中へはうの名は「我」人とは

寛治二年百三十一の草一巻

麻呂敏大末

へし我すも乃草はそと家のうら我の思ひを

建也二年百三十一の草一巻

太上天皇

いふはなすも乃草はそと家のうら我の思ひを

建也二年百三十一の草一巻

右近大將通忠

いふはなすも乃草はそと家のうら我の思ひを

右大夫

わしは乃草おはから白波のうらとすはわな草は

可成の草一巻

辰三位為純

いふはなすも乃草はそと家のうら我の思ひを

歌一しよ

躬恒

いふはなすも乃草はそと家のうら我の思ひを

讀人

いふはなすも乃草はそと家のうら我の思ひを

みくらわく有るや、思召火の下ゆきを、うらや
弘治元年百三十一の思召

入道前々次大夫

かきくもくもくしる声ねらう、は年おろしひ

思召めんを 拾中納言長雅

く我あまのこふ世のひよけいん、うとらぬ袖、思召

こそ、この海、か、付思召

休屋め家

世よ、もく我を、うらや、は、うとらぬ、思召

建治三年吹田十三十一の思

後系信實納夫

年への後、も、思召、わ、我、思、ひ、か、う、こ、う、よ、う、思

後は、性、も、入、道、前、用、白、の、右、人、老、い、休、け、る、村、の、百

思、召、
皇太后文太夫後成

か、は、この、泪、も、我、思、袖、を、い、た、い、く、の、思、を、つ、思

あ、ま、百、書、を、合、し、
入納言通具

き、こ、う、く、信、も、ら、袖、の、ち、あ、う、く、思、ひ、も、その、ん、を、わ、よ

思、召、
衣、是、前、内、大夫

か、ら、た、く、思、ひ、人、の、思、あ、こ、う、か、う、な、う、う、思、を

伊豫

歌一〇八

よみ人一〇八

のきろふのかみちく影をみへしより花もさくねてとて

用白前左大夫家百首見意

前大納言為家

よわうわの里は夏の日よう地しよとてふきと斗ハ

田一〇をよもつとぬけ

今と出尋

契かをいあこのほこ思ひこひにいとあしと袖のあは

前中納言定家

うしにあしあがほほの草あかやういあまもさくさく

吹田十三三

前左大夫

ちよあなるみじこころのあはれかきとちわいねね

歌一〇九

山邊赤人

共にいふいたわひとすすの根はなつと春白の意海

四月一日は人のししよ申つりけ

後京範保納下

うらごけくるさうまじつと郭と人よきとれ也初言た

八条右大夫家言合に及意

左京大夫那補

友しつと到しつとにあはれと人あはる我のさうとて

後不違意の心を

左京大夫源頼朝

偽りの心に心をかゝるるまじき事しに由のじし意のわまらぬ

質成社三の令よ

正三位源家

後の世をちこるるこましくしむしめし意一あるをいぢ

言玉難意ごいりしを

正三位源家

い何くもみそれてこむし違ししの信く系よおける白玉

歌一しす

前入納言基良

いよのうらみなるめおんこころひも命固よむらふ袖のまじき

言玉意の心を

新元并内侍

思ひおにのあつみのあつくはすそ袖のそいから南

百三三の中よ

衣笠前の人丸

い何くもこころの枯れし志め縄に我るる文よりきてこみ

河内橋取家の百三三よ思意をよめら

后二位家隆

人あとのふりしにゆふの心ゆらぐはちやもくを

歌一おみ

吾部元良親王

みかえよめゆふのうらむるよいつまらざるをあらふ

不違意の心を

指律師隆昭

志ねらう思ひけきしも違しよかみくは人よまじり我

は下見寛

百歩風くわしていくつと命つとてあしやあらの別
文正元年の裏しくとくさう諸きりけり
宗本意を
ゆげの家

いけり我りうありにやして又の神とみわおをうと名は
歌しと
漢曆門地お

わあまの意よ命のかうとくうとてこの世をいかに
左京人妻の補家言の言よ

民部が頼

違しとまよふらりなげたに違ふとわい命をわんわ

意のきりして

持中納言せり

に我らるるを信ふとてしきさしと我んしと命をわ
えとみかじらひわらしとこの世は我れんもわと思ひし

西行法師

わあまのあまを思ふと命よとくわあせりきと

文永二年九月十日の言言よ不違意

用白^布た人

わあまの神のやとあしとわあまを限とてくわあ

前大納言考家

とろにわあを限の命とて年月とてあしとてあ

きつりけり 前中納言足尾

うらやまの契いこころもゆきよみきよくのほ

人よれをけり 一条院御言

我美月人こしあのけりこ告しるふはせと鳴らけり

歌しあす 鎌倉右大夫

こまをばにらこの馬かじりもあつたまはるり

あま²とわあにけり

左近大持朝光

くちいぢらふあにともあつたをきと也人をほにけり

板東志を 惟宗忠宗

いふはよほくあつて縁人のいぢらふあを板東に

百とやう人にすめあけるも志のき

後京之後朝光

はの国乃このわあを野かしては内社わきこ人よう

歳暮志を 持中納言忠宗

はれあさけりもあ月日をかうても今更つてあ年の書

後京板抄の家言の契景言志

前中納言忠宗

あつてあ年の書はに共あやぐり計のあこり

あのを書ここの先て二板あつてあにけり人

續古今和歌集卷第十三

志事三

五十三年のうらみけりし高草志

後鳥羽院志

神をくまゆり候を御我いありし一夫のなれり系

建曆二年女三言ちりけり

后二位家隆

東路乃その舟橋そのこつらつらとをよそめり

遠物志

前大納言公實

我を毛終よとわらひいておれおめしおらさるや

一 法性寺入道扇用白家言合

前赤藏親隆

あゝあてんりつらふほくともめのひれはつら松系

歌しるす

前系信實納言

こりわらそをいさく遠路の命をおく思ひけり

志のち言れ申

順徳院御事

情こなまいあつと頼心けり地をいんやん

宗水志のんを

前左大臣

うかどけらんをいそふらわそのゆ水なるおみ

志の言

前司成按察

在法寺控書十三

あはれなるわがよしのあまのまきを方じりて歎しほは日投るや
式乾門院止運

泪のこぼれをよるに思ひよめて着る袖の月を
月前意如を
新院女おゆか

あまの月をよるに思ひよめて着る袖の月を
後鳥羽院まへくゆか

大納言通具

あまの月をよるに思ひよめて着る袖の月を
寛治二年百首言の言月を

後鳥羽院下野

あまの月をよるに思ひよめて着る袖の月を
言の言

あまの月をよるに思ひよめて着る袖の月を
後京極権政家百首言の言

法橋殿

あまの月をよるに思ひよめて着る袖の月を
言の言

あまの月をよるに思ひよめて着る袖の月を
百首言の中言を
中務の親王

あまの月をよるに思ひよめて着る袖の月を
終人言の言

十三年の合に言月恨意

麻衣女大老

有次の月をといひに我あこねあり人の心もせみふ
傳言しるを
入道麻衣女大老

歌——

大織冠

わづらひ鳥のこねたまき子我もよきお用の名義
おろしをこねてよらこねらうこねておのよわつこみ
聖武天皇御言

すしむらわまのを母にいふのこねていふわらひ

田原天皇御言

大系此のつら業のつらわの鳥いよはるあわのわら

後信性も入道麻衣女大老は初逢意

後信性も大老

くふ文ゆくまをく受ら小にこねていふに命を我も

寛治二年百三十九は宮柩意

後鳥羽陛下野

まの心も柩のつらにこねていふに命を我も

歌——

後鳥羽信實納卜

ひすいそく候いふに思へもな成ふこの世に初逢りき

平政村納卜

中へい達よふかにしる国りふくまはる我の神は名あは

用白家百々言よ 是後行家

うらふをいしてよきふはるもつこくよきもの思は

宗鳥志を 後京其徳

高くては我よけねふ下池をゆかにをふの言はつては

後朝志のんを 後京其隆

魂のゆかにち鳥のゆにけは幾度かこつて我志つて

道周法師

初めてはゆにち鳥をいしてはよき言はし

業平朝きつちよ一社にこけりけるなま

よみ人

故乃よのちよをいしてはよき言はし

元良親と家三の合

限と思しぬよをわらふを別のごん乃はこつて

志の言の中よ 後京信實朝夫

衣くの袂はわを一月乳はぬの泪もつてはこつて

歌一子 小休後

まらとわのわの別のごんはいにけの神の思はる

鳥志を 古赤門院片言

まらとわのわの別のごんはいにけの神の思はる

うらなうと娘のくもとのふ留ゆいこ後休る言をき
る色ぬく
元恭天皇御言

とらふゆの錦おむもをささこひけあまのふはすま只一よ
寛治二年百三十一言の言り言

麻右大臣下

よりぬよねをささこひけあまのふはすま只一よ

元明帝幸ち入道麻右大臣百三十一言の言り言

麻中納言守家

とらふゆの錦おむもをささこひけあまのふはすま只一よ

建保四年百三十一言の言り言
後二位家隆

くすれふ入わいのゆも秘をゆめあしうらまの明女

河内掾政家百三十一言の言り言
後朝彦

切のゆみのゆも秘をゆめあしうらまの明女

正治二年百三十一言の言り言
慈鎮大信二

くすれふ入わいのゆも秘をゆめあしうらまの明女

徳意を
祝部忠成

わろまのゆも秘をゆめあしうらまの明女

後三位保季

わろまのゆも秘をゆめあしうらまの明女

麻切大臣基

あしひこに我の良の月をいし定めるも世の神は別まに
宗月をを 真昭法師

る年して神の別我よりめ色同よりふ有わきの月
中文無處にもあひはけりよいとくまいつと
休け我の納まにけりける

長系實方納り

久し乃わよはるるや一月のわそ入りえうきよ
はく文家言今に 坂上毛則

太宰府敦道祝し

我等も人も有切のえをの甲しよふかえけるか那
建保四年百三十三の

西園寺入道藤太女末

独祓乃其こころをいし納おほきうして何じよをかこ也
意の言しごとく 中納言

あまうへく今つていこ思ふこがをいし思ひさうはけ我
中務つ親し家百三十三の

ふ又百三十三の 皇太后又女使後成女

うしあも我のいしをいしのわり我をいしをいしをいし

山崎島意

麻久納言為家

有^レ一^レ夜^ノ別^ト今^ノあ^らら^しく^シ島^ヲ為^して^ハ我^ノと^モ鳴

藤原重頼女

逢^ふと^ハ思^ひい^くと^ハ思^ふ鳴^とわ^り我^ノと^モ為^し言^ふそ^のあ^らら^しく

家^ノ言^ハ今^ハ鳴^意

後^は性^ヲ入^道麻^用白^女為^家下

現^すも^別一^ノの^に依^る我^ノ逢^とみ^て夜^ヲ為^して^ハ我^ノと^モ鳴

百^三三^三中^ニ

衣^笠麻^用白^女

み^くも^性い^つり^りわ^らな^らむ^くこ^めに^ゆら^しむ^理の^言を^行は^す

意^ノ寺^中ニ

麻^用白^女大^氏

思^ひ我^ノ逢^とみ^て今^ノあ^らら^しく^シ島^ヲ為^して^ハ我^ノと^モ鳴

光明^宗入^道麻^用白^女十^三三^三中^ニ言^ハ建^意

洞^院持^政大^氏

ら^の中^ニ一^ノの^よの^言を^とり^てみ^て現^すも^別一^ノの^に依^る我^ノ逢^とみ^て夜^ヲ為^して^ハ我^ノと^モ鳴

後^京持^政家^百三^三中^ニ言^ハ建^意

人^數々^有家

祿^受師^ノ性^いつ^りり^わら^なむ^くこ^めに^ゆら^しむ^理の^言を^行は^す

建^保四^年百^三三^三中^ニ言^ハ建^意

逢^ふと^ハ思^ひい^くと^ハ思^ふ鳴^とわ^り我^ノと^モ為^し言^ふそ^のあ^らら^しく

夏^中逢^とみ^て今^ノあ^らら^しく^シ島^ヲ為^して^ハ我^ノと^モ鳴

参議推行

思ひ移よわいらるる友のこしら社島のよきおれや公衆

志の言ごとしよめら 小野小町

現すくもつにわをさるるくわそく人のみいさつた
友をく又みらういしもあまなりよ申くの現るるし

又さるる薄とられける付宗の友志

今と即言

思いつてあつよも人の志くくは友も現のみゆるかなる

甲らんを 武乾門院出陣

うらつて方の世くつよと思ふも信くつてこの友の通路

志の言して ちん門院小室相

らるるくつよにらるる面影をいよひしよと又て思ひし
人乃をいしとつにけら又のしんよまらるる周の志を

書して分けれり 世武報

くれらのおれららるるいしよのまれわにらるる志の言

寛平十一年付右まの言の言

よき人

故よよきしら廉お言よして鳴うと志をいし志の言

こきくわやけら人の信吉よはらうていしよ乃

杜のよみらういしよとらにれいしよいしよ

けらねのり

馬ゆか

あつと娘ととつとねはの國のいその枯を我がと

宗々名所志

前入納言伊平

付わのね洞よいたもらしの下柴ゆあも娘ういじな

志乃志の中よ

中務卿親王家小督

恨わつとめくつとほつと今も思ひ枯れ後と移り先

今上御言

あつと人の心は川りさも我りゆ志わつと

百々言の中よ

前ゆ久長 巻

しと我すも雲路ゆ星のふゆもかみ我わつと我志ねゆ

光明寺中入道前抄及ゆ久長の付れ百々言

名所志

前中納言定家

あつと我と袖のふりあつと何今我がよき方と

志乃わつとよとけつと

恨わつと命もつとふるつとあつとわつとほさる月日は

女御ほつとのかつとねつとまけるよなつと

らつとさつとゆつとつとを我い又の日ぬり

天曆出言

秘つとねのあつとみつと志つとをわつとつと

歌つと

按察使駿河丸

くまの志我をわいすして日板も共なくしきう人ほあ

人付百代

思ふ世を思ふにいらぬ其の野なるみくさ枯の林うまはる

志の奇して

後京極持政前を改大末

みくさわら板舟の清氷うまわてんはうこそくじんをまよ

ゆ裏百まううま宮の志を

右道中将行平

白家のわさちうう海にふ我初て我もかろあろあし

去指歌うくく人ううまよと休けるよわい思ふこ

ふししと

光後朝末

いとまきしなまこしし思ふ力れ印限の命るうとを

女のししはうこしてけりける文よ

皇太后文太史後成

あやしちうおじら洞はゆすれうこまやね葉のたか

か

讀人不知

みれはゆりうこりしあくちけりてなうこあろふ

世のわし

續古今和歌集卷第十回

恋尋回

歌一花鳥

よき人〜氏

あ〜玉の年のことを恋ひし〜ゆ〜く〜し〜祐新枕す我

光明寺も入道前持家十三年の春よ宗の枕

恋

前中納言宗家

あ〜月〜み〜との後如新保〜〜〜じり〜の月日あ〜

恋の音中よ

前中納言光頼

あ〜〜思〜入〜〜〜わ〜我〜じ〜の〜あ〜あ〜

八条院高倉

あ〜〜あ〜せ〜ら〜の〜あ〜の〜あ〜〜〜〜昔の〜あ〜あ〜

源朝臣門院女将

あ〜我〜夕〜あ〜〜から〜あ〜〜人の〜乃〜わ〜〜あ〜あ〜

後京信實朝臣

あ〜〜あ〜肉〜り〜の〜あ〜あ〜あ〜人〜あ〜我〜あ〜あ〜あ〜

源雅言朝臣

あ〜我〜〜あ〜〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜

大江忠成朝臣

あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜

後入信都守定因

思ひぬく祓けうらる我達しとの有し昔にいと成る
あらま

藤原基總

袖行る我東の床ゆさししころよ思ひ後してわつとは

六帖歌の中よ

前大納言為家

高砂のふら下馬島の人をる人におのめ我危ちくころ

女こもさらにもやけける人のししは馬は成わし

きつちやうらる人ひりりすして

本庄休辰

外さゆらるむくをみつ指の煙やいともはるるし

歌しるねと

中務つ親王家小侍

うしむらぶらうも人の男あこをしと成の心をあわ

百首三の中

前大納言為家

恨みくもわまのあまらあね一色しころよむくんふ

恨方志こりすを 休辰の家

るゆしつわわ力なとこわまのまじり星の上る人よ同し

ゆ又百首三の中

後京極掎政前左大臣末

とくまふとをすまのまの浦しつみよ波のうわいは

歌しるす

柿本人丸

しつあまは極焼衣をうれこも志てふ物い志れつりにし

貞文家三の中

忠岑

人をしていささく目のけり我にあらざる所はゆゑ我に
じい玉のつらうみをとるこも思ひし思ひし我にあらざる

後鳥羽院抄

我の心をかきし凡そをいれ我に思ふつらうみ言ひ

大納言國行

凡そ言ひしつらうみあはれつらうみおとといふこゝろを

源重光

娘凡のちみおはるにわらわをこゝろいひしこゝろを

西院皇后

思はれしわらわをわを中しにふしつらうみ思ひしこゝろ

邂逅逢意こゝろ

六条入道藤原公家

意こゝろいふしつらうみお妙の枕おちりしつらうみ

後京極持政家の百らうみ今も猶意こゝろ

前大納言兼宗

ゆれよ又ちよにつらうみよれつらうみに我を思ひつらう

人親有宗

天河娘のせらるる先しつらうみおつらうみおあひけり

栞逢意

太上天皇

わらわの栞逢意よの娘をまじ紅糸の橋に我を思ひ

百三十一の中より 二位家隆

そ乃にいつに祈りよの愛してつゝ人々月み任地
兼意を 権中納言國信

思ひあまらるゝしるえとくくま月三我をいといか
天徳四年の裏の合は

中務

しるゝ雲のお月を成りしとくく月三我をいといか
意の奇あまらるゝしるえとくくま月三我をいといか

麻中納言山家

ふらふらよほこれとけり月三のせいにみくく月三我をいといか
遇不逢意を 入道麻中納言山家

逢うめよいさ月のほろく後思入つゝ月三我をいといか
後鳥羽院出立

うらけろ人の心おあきひらちよいあつゝ月三我をいといか
麻中納言山家

あらしさくけりまようの面をうそ我こもみく周の現に
建永元年三月三日合は宗衣意を

比叡納言典信

面をうらけりまようの面をうそ我こもみく周の現に
歌一首 柿本山人

月草乃花もわさよ思ふし世我ぬまにけり人のこころ
旧地拾取家百三三号中に

麻中納言定家

なかりのみの中へ娘として又をこころわすれなきよ

百三三号中へ 中務卿親王

付こころなかりし又よもわす草もわぬ人の言は
伊吹のみちなる草のこころを我に届く契なき

月花門地

今こころわすれぬ道しをこころに書し思ひすも

一喜の心を 女高門地も女

うらみかへんこころを我に届く契なき

太宰大貳重家

今こころわすれぬ道しをこころに書し思ひすも

建ちぬ年こころを契なき

人納言通成

偽そものじりゆはなる花に片もよう人の命ちり

歌しり 中務卿親王

なほこころはせし限こころよあつこころはよけり

凡そ二年百三三に遇不逢を

こころけりこころなるわのあり初もわすれぬ契より

友意のんを

後頼朝を

ついでに思ひあふまけに友衣うて討つてついでに

五三十一

小休辰

思ひあふまけにのりふふふの志にむくみぬふ

久世百三十一

友京清補納を

かく斗思ふにむくみあふをいづくよとまらぬるを

中務卿親と家十三十一

源時清

陸奥にわつとふ川の埋又のいりわつとて

五三十一

友人

みらるくはわつとふ川の埋又のいりわつとて

人のんがかりくはけらぬはねのあみあはる

そとく書付けら

伊勢

あつとてふの先しなげれは波のこむらね

ねにののりてををみりく

平兼盛

あつとてふの先しなげれは波のこむらね

建長六年之首三十一

藤左大夫

年ついでに信達しついでに思ひあふまけに

志の三つの中よ

藤原吉門院抄

うれきしにいのまのいのらごしやふくくはまかどや

思不違志の心を 大進中納言衛

わあまご思しくてまへはまといけるをいふわりのらふ

平政村納言

わあまごしにを介ましくてそらまへりしをま

光明孝も入道前抄改家志十三年今よ宗

弓志

正三位志家

まへも又信やうまは様ちいふやまをまよあふ

志三つの中よ

辰三位行能

ふりてわあまごまかよに我が娘の恨じこめてんまき

中務卿親王

あめえりし思ふにうまのんまへりしに

建保四年百三言 光明孝も入道前抄改大下

つらまはるるまをまへりし下の思はれは

中務卿親王家言今に

小替

いふも思ひしをまへりしに信をうまのわあまご

歌しん

前内大夫基

此世まへりしをまへりしをまへりしをまへりし

坂とは是則

あつきの隈むにわらむとせりちとて年入くとわら思ひこころ

女にけりける 中納言家持

思ひよむとてあつ物を申くはるものさし

あひと初乞

續古今和評集卷之第十五

恋尋又

恋恋の心を

用白麻左大臣

よりうら我もこもよし下経よしす小草葉はほりあけ

あま百番言合

惟切親王

このまの人の心はほりしすこころのうら草花程をま

先後朝長よりあけける百首言合

中納言為氏

うらまのうけはほりあをれとすうらまのうらまのうらま

慈鎮大信正よりうらまのうらまのうらまのうらま

前中納言定家

春のよのきよはゆらぐよき物を思ふふのたまひし月の光を

建仁元年三月廿日撰言旨よ遇不逢意

後京極持政前左大臣末

よりこころあねよわさるこころへては信ふのよし月を結し

建仁三年九月十三夜十三言旨よ宗月恨

意 秋成女おゆか

恨くもるこころをさるこころをさるこころをさるこころをさる

歌ししす 常宗孝標朝女

あはれ又いつれの世あつたつとあひてまう有初の月を思ふ

小一条忠かれくよるを思へけは物あつた

られけら 堀川女御

さよげら年思わらるを思ひかへし物あけら

意の申よ 式子の祝

志を思ふこころをさるこころをさるこころをさるこころをさる

女嘉門院おゆか

こころにけりこころをさるこころをさるこころをさるこころをさる

前入納言忠良

さして信ふのふかつけら秋小わて我昔の世結つては

家十言旨よ 中務卿祝し

今又のけこまやあまのこみれつは潤るあをを
寛治二年百三十一宮滝志

長原隆祐納札

み一人を言ふときつね滝にまのあやうは袖よそすおつ

宮弓志
長原信實納札

あよるしとくしそかけれ梓弓むけい申のまをう所

宮弓志
長三位行納

月の浦のほねの橋つこまをすじしこ人を因後か

宮枕志
古市門地小宰相

よひくはつちごまをちくこまを枕さるまにいしあふ

志三の書に
平政村納札

潤るうらりのうさにあまのあまのあまのあまのあ
小町

あつれてこめのあまのあまのあまのあまのあまのあ

長二位家隆家まこ遇不逢志をよみ候多

長三位恭志

あひみくも信く我あのみこはをいそもまを福をの

志三の書に
醍醐入道前々政大志

うさるうらひあまのあまのあまのあまのあまのあ

六指志
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

ありは師

うらよをいわけ我をよ留せしんんぬわがまひを
えつか情い人の方わがまをいし我にんぬいふよ
色社ねと

毛いぬんぢいせらこころをちてねちり男あし
まづうわちしよとゆける中に

入道前々女末

ましつらて候りし中にたてて夕言りり方よこ
夕言のそと

まし世よこまて世れし候るに用いしつて候ま夕言

歌一巻

伊勢

うれをもちしし思我にんぬいふのこま
清浦初末

ましつらて候りし中にたてて夕言りり方よこ
賀茂社前合に 左を中持る候

しつらにいふつらて候りし中にたてて夕言りり
意のち中に 指中約言廻後

情あつらつら思はしし思ふも思ふ人
心三信志家

思ひつら思ひつら思ひつら思ひつら思ひつら

春をこころに思ふのよにこころに思ひしに思ひて分

の二后志家

あつれはこころに思ふをけのいふ思ひしに思ひて分

宗草志

中務親

志我草のよに思ひしに思ひて分

后二位源氏

らあつれはこころに思ふをけのいふ思ひしに思ひて分

歌

素還法師

はあつれはこころに思ふをけのいふ思ひしに思ひて分

三条入道左大夫

あつれはこころに思ふをけのいふ思ひしに思ひて分

右兵衛督為教

あつれはこころに思ふをけのいふ思ひしに思ひて分

皇太后上人夫後成

あつれはこころに思ふをけのいふ思ひしに思ひて分

志我草

平政村朝光

あつれはこころに思ふをけのいふ思ひしに思ひて分

志我草

あつれはこころに思ふをけのいふ思ひしに思ひて分

恨意の心を

式乾門地内

あまのけり昔も今のつらさ思ひおに思ふ袖ふ

枝忘意を

麻友兵衛持教定

あまのけり昔も今のつらさ思ひおに思ふ袖ふ

誓司代持教定

あまのけり昔も今のつらさ思ひおに思ふ袖ふ

中納言

あまのけり昔も今のつらさ思ひおに思ふ袖ふ

本陣持教

あまのけり昔も今のつらさ思ひおに思ふ袖ふ

後京極の及家百三三

小体辰

あまのけり昔も今のつらさ思ひおに思ふ袖ふ

あまのけり昔も今のつらさ思ひおに思ふ袖ふ

あまのけり昔も今のつらさ思ひおに思ふ袖ふ

讀人不知

あまのけり昔も今のつらさ思ひおに思ふ袖ふ

あまのけり

甚或

あまのけり昔も今のつらさ思ひおに思ふ袖ふ

あまのけり

西行法師

このめしよのふと終いしをあるしに思ふやせ
又永二年九月十三日永言今日終意

前大納言賢季

有明の別しゆのうては片違ふくのるつらから

日吉祐意とまき言今日

前大納言隆房

うらなうしや面影のかりあやうすにちれこことあそ

歌しん

源盛四郎共持

面影さうしきあうつとあうな後の世あくのつとあそ

六指歌まき言淡休けり

前大納言為家

いしよのあすちりふり浦はさうしやあはれとあそ

いしよのあは

續古今和歌集卷第十六

哀傷等

久世百三十一

崇徳院御言

かきくらし雨多し何のこころもなほさしめし
万葉集乃多し和ふけけにわくくは淡衣けり

源順

世中をわづらひし人吹らぬ春をよむ世をよむ

歌一

菅原孝標朝臣

何しをわづらひし人吹らぬ春をよむ世をよむ

建皇子のくれく今柳谷よおさめけり

けり

齊明天皇御言

いふきける外は御事と云ふもよしと云ふくしうらけり

天皇智天皇かくれぬくらのらよもつとぬけり

倭女后

人いひ思ひわづらひし玉かたけり

延喜元年二月又彦太子のくを歌けり

やぬけり

延喜元年

春をよむくしうらけり

式部卿敦慶の女をくわたりて右衛門督三物
らありて依ける女也

三条右大臣

春しむむおしと嘆息し又わひこぶ人の世うら
延長八年九月右を府人持曹日と世と所
けり付女卿更衣ふみお依けれ人ののけ
心のおしむしと書付依ける

延喜女卿

母はたふらふはたの今しとまのちりくをそ世し
何一読圖のころよみくじりける

中納言朝也

夏しとつひに思ふおまこころふのれつ又つひに
如

赤瀬の古

兼こし思ひつわつぬらぬの世のそふそはつと
右大臣持定國力ゆりつと後かの家のはつと
さつりちあけつをみくよと依ける

純貫の古

思ひぬらじつと春のちりつと袖のゆら
女卿は子かたの春をみく

清慎の古

後鳥羽院かくれぬきくこのころ

順信院片言

のふつとめ春の産をよこすりてうしろをたふすていふ

大系よおこせちりより一閑しけれり

いる月のみちろのくはいらににわよすしんを彩をきり

春乃よのふくそそき因一のとも思ひのこしんは

堀けれくれぬて後もなれさよりよ人よつ

りけり

中宮上院

有一世のきり必ほくに古郷はたよこしておまのころは

たよよゆりけりよ信正遍昭のしらぬわしを

ころころのちりけりをみく

津守国春

あつとるこきみこのころ梅花わし我昔の春やあつと

九条左大臣うきしにこの年お春は家のころは

のちりけりをみく 心海上人

おゆりあつとをよこそそきんのおにちりころは

建保百三十三

光明寺も入居藤原大末

おそろくつよしのむね指よりをのむねを命をえり

後京極持成のしを思ひわくかの遠忌の日を

崇光入居藤原

千村大持

乃れしよしけり

麻中納言の家

そと我らとていひ一月日うらなりゆくわきに我らくわらふ

此

志明著も入る麻中納言の家

つらみのうらみの月日とてとていと信面氣のまうとも地也

刃渡橋ぬの〜とて思ひくよとけけ

麻中納言の家

つらみのうらみの月日とてとていと信面氣のまうとも地也

人のまく成とけけとて思ひくよとけけ

一の先ら 通命法師

郭らま〜とて思ひくよとけけ

徳賢門地〜とて思ひくよとけけ

一の先ら 堀川

堀川

夕に我ら〜とて思ひくよとけけ

か〜とて思ひくよとけけ

梅無女脚

わらま〜とて思ひくよとけけ

麻中納言の家

事さ〜とて思ひくよとけけ

入道麻中納言の家

ふとこいぬのこつたる白衣とてうらや人の袖をぬぎ

ゆ

前大納言為家

今日ゆくとてうらやまふらつる我の年の暮れゆくまは

虫の鳴をきいて 雅成親

ふよおつら草の中なるまきとくすいしおのちの力をとすけ

歌しし子

殷富門内大捕

清きつこちのうらやまをこゝろいつまの(お草をまらう)

人丸つらうてぬきよをゆけり

た道中おる御

そいよとく昔のたてし我命の路のまはるぬけうあ

あこふをま

前大納言為仁

のちとくぬちのせりあ為人のこに信らうあこみゆら初

月をみくよ免る

徳賢門内堀河

ちかくと月はんのこゆらしすみとつらぬきはこちて

定家つ十二年は前大納言為家一歩行可

てんぐにうらやまゆけるにわくはぬ懐旧こいふ

を 前大納言忠定

ひらうにぬきぬ神格とて洞よのこはぬのよの月

家隆卿の十二年は隆祐納言すめゆける

あ

平時直

あつくも恐ふわりの浦もあいつら多浪もまゝに我々

皇太后宮人丈後成山定家母也思ひまはる

此といひりまら 法橋形昭

かやうこそかくこめりして同引にまじ我神の也我はける

長福門地かく我娘く後高野の即よあこめ

ける此麻大納言成通のよしすうきうさこし

依けるよあら 皇太后宮人丈後成

とく我かゝ思ひたうこ也れ我をわつしあめあめ

一也 麻大納言成通

るさうといひりまらるし我うそ人をまらる

歌一ぬす 後二位形氏

るさうあつみの想う我あもさういひるふあは

式乾門地かく我娘への此おけりまらあ

けり 御用

のうらめ始のわしとあけぬ我はうらめあ

親の思ひよあら 惟宗忠家

そくををいりか我はあはさぬ杖上坂のきあ

宣陽門地かく我娘よける年の後あ言中

あつとあはる 後三位忠家

あやうさうすうさうさう一調くあはの別我

高野におもひをうけける御とくはなほほいふ
袖にともくらのちりつとけおのよえん

源仲業

洞のとうるこども書うたの袖ひくもちやまたのこ

母の力あがりよけける梅のくれよ人のちりつとけ

ゆいよ

源兼氏綱夫

お梅と余あつりしめのおそと人のつとれはなほいまし

いとまごの力あがりけけるこのけしにれいこ

しめよえん

道命法師

ちりつとけのいじよごそとくこめにあつてはなほほいふ
おれ

いよえん

高井上人

片ねるお梅のいぢりあつりし何よまうてなほほいふ

西村法師

清くしてはるるのちりつとけの草花はしはすまはな

院入内典法

あつりしお梅のいぢりあつりし何よまうてなほほいふ

七条院権大夫

お梅はるるのちりつとけの草花はしはすまはな

お梅のちりつとけのちりつとけ

後京高克

世乃中がくこゝろ女めれしく思ひにわかれし人ま
母のおもひよゆけりこゝろこゝろもらそいぢり人の

許さうつりける
たを人お通雅

らるゝうをらるゝ家の力をとて人の家よ神也りし
かおゆか人よきしをう境ゆけりをゆゆ力及
りて後ゆゝ案をふりおへつりゆけれはよ

めろ
妻前白丸大哉

妻より家のゆゝ案をゆゆけりきき神也りのらま
しるゝゆけり女の娘力ゆゝサトける神五月の
しるゝゆけりけり日廣ゆけり

前開白丸大哉

つるゝゆけり娘之令じりし神もらるゝ神五月の
右人お通雅母力ゆゝりての比雪のふりける日
よみゆけり
入道前右大哉

いふ又うそと答のゆぢりるをながめてしうじけりこの白雪
ゆぢりるゆぢりるあつこらゆぢりるゆぢりるゆぢりる
ゆぢりるゆぢりるゆぢりるゆぢりるゆぢりる

太上天皇

ゆぢりるゆぢりるゆぢりるゆぢりるゆぢりる
檀中納言ら案やよしの末じりる方ゆぢりるゆぢりる

我ハ後休けり

前左大夫

又とまの春の別をふけりしとまのふかしのるゝ世に
卯比前左大夫のしとまのふかしのるゝ世に

前用白左大夫

まのふかしのるゝ世にとまのふかしのるゝ世に
也

前左大夫

今よりよに我の世をいせりしとまのふかしのるゝ世に
又の腹をいせりしとまのふかしのるゝ世に
しめり

信下實傳

わさ推しりしとまのふかしのるゝ世に

大中後徳宣朝長カ方ゆりて字九日の内

補親カ方ゆりて字九日の内

奥に書付休けり 人江道徳朝長

又とまの春の別をふけりしとまのふかしのるゝ世に

後堀川院カ方ゆりて字九日の内

年つとまのふかしのるゝ世に

後とまのふかしのるゝ世に 右兵衛督基氏

又とまの春の別をふけりしとまのふかしのるゝ世に

後とまのふかしのるゝ世に 後徳人ち左大夫

又とまの春の別をふけりしとまのふかしのるゝ世に

よめりるをいひにきく雪のわ
に慶政上人のしつりける

用白前左大夫

かじきつてはむいぬにらるるふねをいふ雪

けり 慶政上人

つじきわらわしとて後雪の世よりりりらるる雪

九条左大夫をてのしつりける雪のしつりける

わらわしとて雪のしつりける雪のしつりける

申つりける 前権僧正道玄

のりりけるのしつりける雪のしつりける

は下覚寛力ゆりける後よきける

は下覚寛宗

いふれつとて雪のしつりける雪のしつりける

けり 是下尊宗

今更よゆりける雪のしつりける雪のしつりける

ちし門地つとて雪のしつりける雪のしつりける

けり 湛空上人

思ひきつとて雪のしつりける雪のしつりける

人納り典体方ゆりける雪のしつりける

前入納り為家

るまじりしは枕をゆゑに後みくつもくしをせむらじ
後系保昌納を方ゆりて後かの八条は家よ
ゆゑにうらみくつにうらみくつに

能因法師

うらみくつをきくもる松凡のこれう人の袖う也我々
西園寺の境をえし 入道前を政人

多う人のうらみくつを今いふみのうらみくつを
隣もよ誦經のうらみくつに

天台座主澄覚

つとみの鏡のそしこう表る我いふ人多くのそりあ
一 八十ふ其うらみくつをうらみくつを
うらみくつをうらみくつを

信實納長

にののそきのふしすこわふも又よも思ふうらみくつ
曉のうらみくつを 雅成親

我い又ゆるこまわらこめわらよめつ曉の島のそ
和言所よりく述懐言を合付けるよ

系議雅經

みかこいそこわ(也春のいぐり)もわら我方の袖は秋凡
はあかられいそこわ(也春のいぐり)もわら我方の袖は秋凡

女上の世とよしいとせける

天曆御言

かろきとちりきつるまきし白彦はけあつて種とまはす

歌——子

尊使は親王

かじゆら若こころじゆらよまをくはのうへちちりの方を我
半重は力取りゆく後佛事の折しとるま
ありけり平也けりまはしりける

中務方親王

思ひ出さるふしとまのこころ我とこころ同のあまらるが
又つ力取りゆくのらよとせける

前大納言基良

そらうい世のふら道我とこころわ別はる世と
歌——と
正二位知家

にのよの道のつら世のま物をいにまこころ世をせ
参議成村方取りけり世とこころと
歌よて淡休ける
前左兵衛督惟方

こころい先まふあけのゆら世とこころと
よのらつるこころ思ひくようある

貫之

うも我たいけるはれても有物をとあま方のこころ世と

月の和葛年上人のししにゆりとして後人
らしめしるしあはやくはけるよ力ゆり
ちの後のつこの物ころと思ひ出くかの月
わさけら付よみはける

慶政上人

あつたわびつころ上の娘は月多くさあつた我らよ

おししと

西行法師

ころよわく我らつころ女よはわると思ふ

るを思ふ

續古今和詩集卷第十七

雜歌上

又永二年七月七日白けしとく歌とさしり

七百三言人々にしとを伝へし年中を者

こりしと

太上天皇

初音しと思ふと病をこしと後よりさしきころ春の宮

甲しを

入道前左政大夫

雪ふりころしりかみらるる年乃ららるる若如曙

百首言よみはけるよ春言

正三位知家

塩みくいのまの物しむゆりし屋よらうらまき柳の糸

春留の心を

藤大助之基良

春留のあまきみこのあくこいおじゆらうあつる袖が

歌ししす

赤いん長基

草もまた内よわいなる春留よとれある袖に泪るあをを

枇杷殿のしえの花さくあるあけををみくよみ

休けり

民戸も家

むのうらりよ物のうらまきしゆりのこもるあし

昔み休けり所のじめをいれまようおまけり

そみくは休けり

馬ゆき

春もく自しをる梅のむ昔はれわいあつる

歌ししす

左兵衛指高守

袖ゆれはれいなる梅のむまらうとく人このあつる

藤大助忠守

いりり春の光ととわかよらうあつる月の袖よみあし

順徳院寺

輝凡に又さうとあはれの國はせ田のまの春のあをを

古川門院寺

ゆら屋まわいぬれとるまきしゆりあつる春の道路

堀川院寺付百三 辰原基俊

世中にいづくにつくか居ちよるり里(いづくも)は
徳花んを 入道前を改大老

七十に到りてとゆゑわが方のいにしへの事も徳を徳也
二百三言中よ 中務卿親

花さぬさこのしほきよきに梅をみまへし心志も
前付大老 喜家百三言今の考奇

用は家民

みささといふあはれ人の多くさみくうさふはつれぬむの故

花言中よ

中務卿親

ちよよいそり人の心もしりろふを多きみきこるはこら

前大納言考家

花ささしけの考のさきりしてつよふといは更すのれよ

建曆二年二月南殿のちをそくのひくは後

ちよらして

後鳥羽院也言

竹花をささしけの考の人うさささく白(事)のこもむ

赤議雅行

長わつ毛の御代よりやむのからしぬまの年如(よ)る

はも元年百三言也を

前大納言考家

いかに人のいふつゝは花中ををりてみ思ふ也

又元元年春物尾の花のひびきはし

今上天皇

かひりくさるるにう白袖かたけの昔の花のさる

ゆ

兵部隆親

ありけりやの女もさるる花のさるるにうむよふにうむ

歌一節了

後鳥羽院

るれやうけ世をたれとみりうのうは様とあそちる

中務の親王家百三十一

友永はは納女

うき世をいもみくくさるる思ひもるるにうむよふにうむ

殷富門地大輔之権社に

はけり

権中納女

かゝるにわの世の考の思ひいさるるにうむよふにうむ

草卷の麻もむの笑ふをみ

貞慶上人

わくろれ考の心を今よりやいよさるるにうむよふにうむ

友永信實納女は吉社にうむよふにうむ

山花

祝部成賢

梅を咲くふゆに白さるるのうむよふにうむ

文集は百花落如雪支鬢言似糸

按察使隆徳

みんそじうのまはつとけら花はむすのまはつとけら

修行一休けら付花のよをよとよとよとよとよ

けら

西行法師

わよくみむす又花とわくれく今いふとよとよとよとよ

老後花をよとよとよ

前律師孝暹

花はまの今いふとよとよとよとよとよとよとよとよ

花のよとよとよとよ

後律師忠實

面影乃うじねむとよとよとよとよとよとよとよとよ

前大納言伊平

いふとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよ

歌一休

伊勢

わらうとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよ

わらうとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよ

前中納言隆家雪林院の花よとよとよとよとよ

つとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよ

小野宮右大夫

折々のいふとよとよとよとよとよとよとよとよとよ

花言中

西行法師

祓りい花のよとよとよとよとよとよとよとよとよ

夏原基政

明也我に信しめしむる我にわさすことありぬよはゆさる郭ろ小

後法性寺入道兼用白右大臣の内の百そまう

付島

刑尸ノ頼補

然りきくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

歌一十

延喜寺后官大補

今してこふとあさりくくくくくくくくくくくくくくくくくく

雅成親王

いふふに洞くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

百そまうの中

前大納言考家

古くおといいに地はりくくくくくくくくくくくくくくくくく

夏原を法体くく 静にた親王

夏よりわわもまきくくくくくくくくくくくくくくくくくく

又月をよまら 法下尊海

あさけの入江乃ち一流あしてしむしあくら五月あは

夏凡とあしむ 法下尊信

ふいふの甲一柄のみごうも西にまきくくくくくくくくくく

漢文まきくくく 平付親

夕立のまきくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

歌一十

其嘉門院右衛門院

人し我す社いふる此を蟬の力なるを思ひて

六月後の心を 古寺門地出言

みろくすすの夜よるる大わこの事いわうに各事川

いしつか 忠義を

夏にけり雫このほこの戸か切ての後う涼しうけ

中務卿親王家百三三言一娘

前老無法皆教定

うろくくに居りアッわ我神の光の洞と娘いまをり

寛治二年百三三言一早筆を

夏永意後初末

けしねわ力ともぬと娘く我いっつと驚きわと居けりけき

娘言中に 藤原系に能

幾まこのをうこの居に去る我を衣るさかと娘の初凡

天台座主澄覚

凡しうろくつねわりし娘く我いんみす我わたくしうるを

光明寺寺入道前持良太子

伊と鳩つわつね松京みらるといふ一かつまを娘凡うく

百三三言一り時海路を

前切久長 基

ねけり入海のまをくちしけの清咲す娘は塩屋

娘をくくくこけるるるの教ありと泪う花のまきくけら

本懐のまの申よ 源兼康納末

ちりよけまづ。まじゆこのうのまにみさつり。まの娘は初花

二百三の申に ちと天身

黒のみいすらふれまじこじこつ。まじゆのまを建

日吉はちりけら言合よ

ふとほの家

あふよりあうとほらぬふ萩京みうし屋の娘は夕花

あさつかの花よりけらつりけら

栗田園白贈る故大夫

胡ののりあめはのあよりと氣あつるまじ世まあ

娘

源英内納末

人の世のあつたのまをこみ。種もあはれおける納敷のむ

百三の申に 順は流し言

人るわえまとうらる。まじここのへは娘のま言

娘を

中替マ親

まじこ娘のまをさうらふ物也。まじはまじ

杖の言申に

権人納言教家

我んこゆら所いあけれまじはかく。まのあまはま言

友京康徳朝末

よきしゆく書わのりゆの泪之袖はきくはぬはたま言

藤原門院女

車乃坐の衣とわ乃衣くふ我袖のまがとね故のたま言

百々此言申よ 順徳院女

かく斗よの思は故のいこまは故のこつけらわの泪ふ

布しるる羅の竹のまこまは故のまよはる故の白衣

歌一巻了 後鳥羽院女

共く乃くま乃衣わわのこまたま言しは故のい

とに信光

いふ海は故のたま言くこまは世にまよはるるたま言

月言して 平義政

いふまはくこまはくまのいそね今下は月のまを

辰之信忠兼

うらみすまはくまはくまの月まはくまの泪を

権中納言も雅

其まはくまの袖をくまはくまの月まはくまの泪を

辰二信成實

幾度わわの乃衣しはくまはくまの泪は月を

平時茂

あ乃くまをくまはくまはくまの袖をくまはくまの泪を

雅成親し

いづみかほるくえの月の国のもろくきよるるに
梅懐四こいづらんを後休けり

前人の言也信

むらくのちの月のそがりまことゆき首の故のよれ月
よとすの月をた後し

東之る也

いづみかほるくえの月のけよ首をちるゆの春けり
八月十日良月良あときを候けり

天曆の言

いづみかほるくえの月のけよ首の月より月より
歌しをす

前人の言也信

いづみかほるくえの月のけよ首の月より月より
知れり月をみよあはるの言よを休けり
中に
入道前と改人未

いづみかほるくえの月のけよ首の月より月より
後を時地るるのいかりゆけり付けり
いづみかほるくえの月のけよ首の月より月より
いづみかほるくえの月のけよ首の月より月より

兼仁は祝し

うしろの秋はゆらの月のほろもろかよとてわが心もよほりけ
く
順は成れり言

もつよの雲のの月つらきとてわが心もよほりけ
右兵衛督基成

じいぢのよりのゆくゆきとてわが心もよほりけ
女房のよ月を 中務の祝日

心をぬ神よの月の氣よとてわが心もよほりけ
はち元二年百三の言

夏原信実納札

くも然こもておのれは月のよ月とてわが心もよほりけ

百三の言中

順は成れり言

勢ら我の心もよほりけとてわが心もよほりけ

秋の申

能國法師

夏の日氣よすみとてわが心もよほりけ

巻後日落系をみ

入道前々人老

ようへてしみ我の泪うわらゆとてわが心もよほりけ

歌

夏原信実納札

木如葉のうしろの心もよほりけとてわが心もよほりけ

源親成

その中

藤原信納書

降るや幾日とす雪の心はく人の心はわが

平親清書

凡そわがまを雪はもゆるが我ら月如氣うさ

正三信家

納めよそもやみら守りうみじりの思は積る白ゆき

雪書

西園寺入道兼右大臣

白母は雪はつら力も有りくね後うさ有月とる月

その中

中宮持人納書

布の心雪はつら力も有りくね後うさ有月とる月

信守實納書

中に

皇太后太后太后

しとて雪はつら力も有りくね後うさ有月とる月

果書

信せ法師

危也我らつら力も有りくね後うさ有月とる月

大納言通具

いさつと月日雪はつら力も有りくね後うさ有月とる月

藤原信實納書

年いさつと月日雪はつら力も有りくね後うさ有月とる月

むの奴

續古今和評集卷第十八

雜歌中

神龜元年十月紀伊國日高郡の村より

山邊赤人

わが浦は塩からく我らも流わくをうてぬり鳴後
越中ちよとくくうとて休ける所淡休けり

中納言家持

淡尾さじくやあまの江よにゆまにりては後

歌一とん

讀人一とん

ふにりては塩いよあつてみらるとは後法の鳴よぬり後

又百三十九の歌の中よ 後鳥羽院の歌

かこの鳴ねあよよみらるとは有月の月よぬり鳴後

寛治二年百三十九の鳴後

今上天皇

そらりては塩いよあつてみらるとは有月の月よぬり鳴後

後二位成實

あまのしれぬよと昔よりかぬり我は言そのまうき

百三十九の歌の中よ

前右大臣

くさつこの入江のここのあつてみらるとは有月の月よぬり鳴後

歌一とん

小野小町

すむ乃わまふ〜博舟のつらさを〜よりなる〜方そ悲しけり

人丸

こよ更く堀江ちくちなるまつ〜舟つら言ふし〜

歌と〜ちり〜七百〜うん〜い〜うも〜

わくに〜舞中歌と 太上天皇

袖のちぢ成じゆを〜し〜るの〜い〜ゆ〜

河津栲女家百三すよ〜肥分と

後京隆祐切未

浪われい〜あゆと浦の波月より〜ん〜きゆらわ〜

歌〜ぬ〜 平泰村切未

世と〜あつわよのふ〜の〜い〜え〜ん〜の〜む〜

岡勇法師

若祓り〜入江のを〜祓ます〜つ〜ふ〜よ〜こ〜

中務や親と

ま〜つ〜み〜〜う〜ゆ〜あ〜る〜の〜ひ〜ら〜つ〜し〜け〜る〜

月照庵水こ〜んを

後京栲女前を〜ぬ未

山人の衣を〜し〜白妙の月お〜う〜と〜ろ〜布〜

布引庵と 糸主補親

氷上〜いつ〜なる〜し〜白〜も〜る〜り〜お〜に〜ら〜布〜

月一庵をいふりてよきゆけり

源後頼朝也

山娘の若き指に引けりてよきまゝ思のり庵の

女百毒言の言よ 人憂つ有家

凡吹のわよ乃とあつたのわれまゝとてよはつ破よよよの流

中務つ親と家百毒言の中よ

誓り流師

切ろつ流の若きやつとあつた浦よあつたあつたの流

八幡三千言の浦を

友京信實朝也

里の若き指に引けりてよきまゝ思のり庵の

歌一巻也 柿本人丸

ふつと場とあつたに海東つとあつた流またつた

式一マ字合

雙の若き指に引けりてよきまゝ思のり庵の

可き言の言の言

ちん門流也

いふと野つとあつたに海東つとあつた流またつた

三言の言の中よ 中務つ親也

ふつととに指に引けりてよきまゝ思のり庵の

佐吉の社にまうくけり人ゆりちほしよき
あし申けりよき

清女納言

いほくつまけりほらち草より佐吉のなりてみく
熊野にほくつまけりおてよ佐吉よく浦の
松を
今上天皇

みにほくつまけりおてよ佐吉の松
真子郎よあせりよき
あしをまけりよきとねあけりよき

長喜おき

まがわりの野の川の氷とつらよき
月夜中よあせりよき
あしをまけりよき

赤澤伊衛

はよゆりよき
板と毛則

乃川の入は松先よき
歌
中務

久わ川よき
あしをまけりよき

くまのしるしゆりこの鏡のをうふらふのこよの春のよの月

正治二年七月三日水邊月

西園寺入道前々後人未

青羽けせこいまゝ水よりをこめて人の心を月よみうふ

歌——と 及原為總切未

我のこや入江の流に袖おきて志にあらぬを月より我入

中務つ親と家百三三三

麻ゆ又未 春

六十のよとみじかきふり何れそ人のこゝろ月日あし

月三のの中よ 中務つ親と家右衛門督

何れにんをさめく有月の月もうこせねえよふらじと

及原信實切未

あつきのこ思ひをうらうらよせらういさ月をみだ

世をのつれていんじうよこまわく休けつ此月を

み 権中納言義懐

人々のじううめろ月影を都もあつてうらそくや

歌——と 按察使隆徳

かからまはののれ想ふ又んをすけら道をとつてや

及原番三又三三 前入納言忠良

うらうらとていかにちちわくわくおしよらるるはなげ

あふくしをばさるるまじき一箇のまじきかぐし年の人ね
後京光後納夫

いづれくつ神うらやむしほ水のまじきまじきわめいさし
大江頼重

子守りくせよらけけのうらやま水ちりこまじきあまの神は
百々あまのの中よ 順徳院ちり

うしごてまばいじくまの海のうらやまはいじ
是懐のんを 蘇切久夫 奉

付しにいじあふくしご思ひくつわぬうし世よに我なるは
貞慶上人

日しうんく国のあはちけ我いあころりあのをこうよん我
を人連懐こりくしを

平政村納夫

いぬし世のうらやまうらやまはをうらやまてかは歌は
道月法師

さうしあまのうらやまあまのうらやまうらやまの浪けけ
百々あまのうらやまは連懐を

入道麻右次人夫

因人ともく我を思ふ人の旅あらうよにきかすうらやま
熊野はうらやまけけけけのうらやまはけけ

しつゝ一野原に里に成りけり
たててはまの住いなり
真昭法師

たつたの尾上の文の儀ちりり
われり後と幾世入也
後京基成

み一せこう思ひごとく思ふ
我をわじりのさうや
えけり新恒

水の面よめいし
草は波のこまや
後き好徳止り

人音もこのんまかりり
野中の清水ぬれり
刑人お捕

たまにゆき我ごとく
おまをりては
百三三のちり
入道前を収人

じり今思ひのこ
お福え小唄りり
巾を後休
衣笠前の人

鬼乃島の言き
あつては
前人の言考家

あは思ふね
あつては
大僧正隆弁

うゝや
はえをぬれり
うゝ島のつ

建保四年百三十一 亦中納言定家

わをわしてゆふけ鳥のおまじやいおれり別の神也

用路鶏言しを 心同法師

用の戸もつらちく成よを今鳴鳥うねを

歌しを 蟬丸

相坂の用如あしりのをしにまわさう丹

あつたま

續古今和歌集卷第十九

雜歌下

寛治二年百三十一のちりけり海眺ら

入道亦左大臣

うみりつるわさる波のしよまをいけりちりし

亦人納言為家

つらさるわさるの波るよりのたわさるきさら

洞津抄改家百三十一

源家長納言

浮動よよきなるその沖よわくめりしわを孝のわ

後鳥羽院よりつけり百三三の中よ

夏原秀徳

凡吹いけ我乃鳩こゝのしこりるんおふあまのじよ

歌一十

麻人納言為家

凡らふ濱名の橋お夕ふらう我てのふらあまの為舟

中務親王家百三三

夏原克俊納言

月出くひまこころ我まのそよ夕らあふらわよ乃舟舟

凡也二年勅撰のゆかかき我て後十三三

海一ふくは海邊月を

和歌集一々おぼらふこき出さあまのあまの月をらふ

凡三の中よ

中京行實

更ゆをいふけらふ吉野なるふけの川お娘のよの月

右を中ね行年

我方く物思ふしとあきこぼしうさよのゆら月をみる

あめあふらうくわのじよを淡ゆる

瞻堂上人

草の宿を月うまよは出ぬまに熟くすこよねんうまよ

歌一十

古所門院忠房

そわよわやこころ我れ娘の月いとく我らるるんこころ

祢人納言停年

月夜みよのけやのころをわらわくわくぬ袖の泪

百三三の中一

麻用白丸大末

幾かいっわく我じりこ思おく方のいふつと月を

くまの家のく月あつてけつよじりを畏

せく後休け

後納言

いぬの面けをさけしうとまのいこもすやう月

月麻思は事こりしを

中丞師季納言

古を思ひおぼくふし我いやるるこよくとほ月

歌一十

西青法師

じり思ふるこるもの我て月都にすじりひ

通令法師

かふれいこいさくを我よとくみじり月のつ

娘史對月こりしを

太皇太后まを史隆後

月こいさけみよとあつて我をいぬれかたひいつ

月麻速懐こりしを

後御人古丸大末

今も我月とあつて思ふぬこつとらくもりこりし

小野祐言今も速懐を

正三位志家

我も又よのちちり有月の月をわとれとる多きしゆ

歌一しよ

惟明親王

ありけら之痛のむらじいといふ人かうおん

よみ人しん

古のいさねを我みくもえくちあねのくし

柿本八九

年にもちまきくこのよはるこのはく久くみよの若ぬひ

わすし何の言うういふさまのち概しけはえたとし

よま百番うなう

皇令后宮大夫俊成

から滝じちくのなりれにれとるわおさつ白波

百まの合し野行幸を

後京極権政前左大臣

とちけの波とびうよまのつとみゆさそとねとつま山

建也六年正月柿本新信一依一真影を

らこしはらうすしけみ紙し書しを依し

とと天皇

くふをいにならるすしじりよちまはるれと新し

け

正三位志家

ありやくよらひをぬるすのえしお新し我元のえ

百三十五箇の中よ

古本門地止言

おろろ乃ちやのふる道いりて後申後言のふら

歌一八

中納言家持

ぬきつる命りか松をいす人いふくこり思ふ

後言よ流てよある 後系基隆

後言よぬのいれ海をいすいりりけり松のこをい

後言祐言言よ 後言三松改

いぬつよ年としけり浦に生る松を我方のこをいやる

言砂の松をい 能周法師

後言松につる方とつねわさ砂の尾よよめてる松をい

みけのまじを

後系基隆

後言あつ又つとつ之はの園のみけの松よおとつりする

後言松につる方とつねわさ砂の尾よよめてる松をい

りけり

源後頼朝末

いづつなまの松よみく我て鴉の草くこちらち

と

正三位源季

とつとついよの濱疾風吹はちりよまのこ

述懐言中よ

後鳥羽院下野

とつとついよの濱疾風吹はちりよまのこ

すつとつ人のまじにつる方とつねわさ砂の尾よよめてる松をい

藤原納言為家

うしろの道はくさのたきいれううにんせく母よにんあ

百三三のよ

左兵衛督高直

たわねいしちの道はちりうめい今りく末のゆりしりふ

左大将はけり村家の百三三のよ

後京極掎政前々後人

八雲にいにいりてつるまきしじりのたにてつとをり

十三年の申よ

藤原文長 基

八平の道はちりうめい今りく末のゆりしりふ

本懐のんを

体良行家

今も又いれりしをいりてつるまきしじりのたにてつとをり

よ又百三三のよ

源具親朝長

石上らち中道まてつとにいりてつるまきしじりのたにてつとをり

老のら都をすまてつとにいりてつるまきしじりのたにてつとをり

ら

皇太后まてつとにいりてつるまきしじりのたにてつとをり

馬にれねりしをいりてつるまきしじりのたにてつとをり

と

藤原教雅朝長

つるまきしじりのたにてつとをり

父秀経の言をいりてつるまきしじりのたにてつとをり

藤原秀茂

神あつてまことみちありきつとせし不草書なつたのちのゆゑ
申替りしつゝ幾おまきけるは草子のあはれよまこと
の契りなまよやとてなかりりていつて休けれは

天曆贈大皇太后文

みれこなる成野へより我とねまうは契りなまのあはれにまきしは
速懐言すは
今上天皇

さう竹のちのりのりし思ふよりのと我思つて二年とる
老の後漢休ける百とる言中し

后二位家隆

いりよまきまひりやうとて年おまこと人を哀し思ふ世とる那

仁治二年百とる言すは
入道前左大臣

かゝるる人へまきまひりてとるよとてして秘事のまう鳴
歌しつゝあ
はに後通人

前大納言忠良

かけつゝあをくまをくまんとわぬあう泪のうまをまき
堀川忠成村百とる言すは

後新御

是所乃うまとまきしつゝあをくまをくまんとわぬあう泪のうまをまき
夕暮にほつこの竹は葉如鳴を同し

日く我の行のうらふはわらもてうらふくもなむ

高倉連懐

藤原基俊

付しは思ひきゆへに朝家ゆへに我事しにわがは母の

建武元年和言所の連懐三三三三

麻中納言守家

思ひをく流のよふのきふ草毛をうめい方の信わは

夕のあしつを

古所門地止言

夕暮のふつはゆへに白雲のうらむえちる物いおとら

古言止言の中よ

順徳院止言

くろくはよめのいれにかけれもまねう人の命けは

連懐尋日

後三位源経

思ひを方のしつちをききうらむえちる物いおとら

古言止言の中よ

鴨長明

いしつちをききうらむえちる物いおとら

堀河院止言百言止言の連懐

後京師仲納言

きつちをききうらむえちる物いおとら

歌一巻

後京師基俊

わつちをききうらむえちる物いおとら

源後定朝臣

すもをたはききせうしこころ波の上にかへるふらあをて

後ちあ門はた

いげおにせりるゝ名おわゝいさう杉をこけの下にゆゑん

真子院ち奇

舟中をいこいこいこいこいこいこいこいこいこいこいこいこい

二百三十九の中よ 太上天皇

わらうらよ思ひお外のしこみに思ふいりりおしき

空の夏連懐を 開白前たた

るようち愛てふおのわつと物やあつらうらまかぬ歌とん

白く三の中よ たた

きくこころうらなかつけおあつらうらに思をたて思ふこころ

弘長元年百三十九を

衣笠前た

ゆらむしゆんのをれこころあしと愛の思れこころ

歌 申勢卿と

愛いおれしこころ又とつとをこころいおれうらあを

依辰の家

うらこころねうらうらけお愛をこころあを又とみくは

源具房納

る思れうらうらと愛あかりおをわらうらこころ思ひけら

持僧正弘真

ちきよに福のついでにさしつかへなく
信實納夫

因るるにやうらわするに鏡のこゝろに
老後述懐のついでに
老後述懐のついでに

裕盛法師

あうらるるにやうらわするに鏡のこゝろに
連せは法師

いたしきよに福のついでにさしつかへなく

中務卿親王家のついでに
大信正隆并

今うに我々のついでに
選子ゆ祝賀のついでに
有けるにやうらわするに
入道兵部卿平親王

後鳥羽院のついでに

いにもさしつかへなく
東述懐のついでに
古比門地小宰相

あつたに福のついでにさしつかへなく

うしやくし我よりらくお思ひしんよつは孝女のしんを

建保四年ちりけり百三三

慈鎮大僧正

からりいんせうしん世をうしやくやんいやくをいぬりく

歎しんか

後頼朝

世中のうしやくしんをわかれを思ひしんよつは孝女のしんを

入道前太政大臣

よしやくしんをわかれを思ひしんよつは孝女のしんを

思ひぬりまはけりしんよつは孝女のしんを

正三位源家

よしやくしんをわかれを思ひしんよつは孝女のしんを

東に流るる身々后まうしんをわかれしんを

をわかれしん

東に流るる

かたにわかれしんをわかれを思ひしんよつは孝女のしんを

上東門流るるしんをわかれしんを

赤染黒門

かたにわかれしんをわかれを思ひしんよつは孝女のしんを

よしやくしんをわかれを思ひしんよつは孝女のしんを

のら世をうしやくしんをわかれしんを

東に流るる

うらたに有しあむおむ世をうらたに國をいふ
藤原仲純納長出家して休けり又の日はつ
りけり
後三位為繼

まうにわらね社の娘の凡いける多きはあつらふ
也
後京仲純納長

神のうらたにわらね多きはあつらふ
出家の後流はる
麻大納言基良

あつらふわらね多きはあつらふ
内教法師

うらたにわらね多きはあつらふ
小休

うらたにわらね多きはあつらふ
修明門院大尊
高井上人よつりけり
平泰時朝夫

うらたにわらね多きはあつらふ
高井上人よつりけり
平泰時朝夫

思ひつらふにわらね多きはあつらふ
高井上人よつりけり
平泰時朝夫

如

高弁上人

人志我寸思ふあつらふいふいふは留る我らとるあつらふ
百三三の中よ
後京極格取前古取大夫

うにれ我思後のあつらふいふいふは留る我らとるあつらふ

よ昔書言ふあよ 大親つ有宗

思ふあつらふに我思くてもくす九わし我方の末はあつらふ

如

存可陸梅堂

方のいふのいふにわもあつらふいふいふは留る我らとるあつらふ

古止門陸梅堂

思ふあつらふに我思くてもくす九わし我方の末はあつらふ

右近人右通也

いすらに人かいつい我世の中のこといしをいふかといふ思ふ

衣笠前の人

あつらふのいふいふに我思くてもくす九わし我方の末はあつらふ

森伴法師

思ふあつらふに我思くてもくす九わし我方の末はあつらふ

壬辰也冬

深げれいぢいらの海行しわぬ人の思ひいふいふは留る我らとるあつらふ

小野小町

あつらふのいふいふに我思くてもくす九わし我方の末はあつらふ

人納言良友

うゝ世していとし捨てていりて見ろむゝあゝとて救をね

述懐の言中よ

控女信都ら朝

いぢりいぢりやねしゝるしゝのなけれとてくり月日ふ

清瀬胡夫家言合よねりゝんを

祐盛法師

思ひあゝ又るにしとあけれたすゝた世にう捨ててね

一歌しゝ

麻律師永観

よろふと歎くもあゝよるるよをたしゝいゝんをなと

麻大納言信平

いゝいゝと信いゝふつゝ世のうゝと見ひりゝと思ひねふ

光明寺と入道前持政家百々申よ

友原光後納

今何とてあゝ思ひひねるれが力なけくゝとてし力な

述懐言あゝとていゝふはけり

何ゆゝもいゝまゝとて世にいゝあゝ方うゝんのか

福さうあゝれ

續古今和詩集卷第二十

賀奇

後朱萑院しもの院ぬしは百日の夜よもをぬ
けり
一巻院はう

二葉より松花よりひを思ふよはらふうめしとの物こひみ
は島十又年の山屏凡のう

躬恒

よ世をゆる松よめれを若る我の年のをまゝ成ける
上東門院入口の屏凡よ

花の院はう

吹凡のえこもるしをわめは花も志にたふふをまゝ
月院乃后のえこ申ける針すしこのえは梅のむ
をうそりれて成けるうそくちさつとを
みく淡体けり
伊坂人跡

しんしんときさうらひえこを梅の梅凡はちさうつたを
は吉三年二月梅山仙洞より幸ふは花院
年こいふしを梅きりけり

今と御言

きしおしそわぬらうとあひめこまは花のむをまゝ

中納言

花みくものけからくわ我も文に後とてわ考のふん
片つこの日はちをくつわよちと書つた
は梅のころにけくちと書つた

た上天皇

梅の冬に花のじりの考けつらきわき鳥のふん
正元二年三月大宮院西園ちりく一切行伏
養ちりれ一日行幸休一日東宮あつて
り啓わつてけこの日く競花言淡休
久くよえそつておて笑は考と花と我世今このあは

入道前右政大夫

ふくよこのころ梅のふきふくちんこのころは
ちのふくよこのころ梅の花をふくよこの考つた
はつこの後わぬ花をみく淡休け

前右大臣

ち干付右道大夫

入道前右政大夫

は考つこのふくよこのころ梅の花のふくよこの
富家入道前用白おろくく清水原村
の舞人けりけけけ付京極前用白の家
こあつてこのころとけけ

源頼徳納言

九月より菊花を 聖武天皇行幸

百敷にうらういふは菊の花白くあつらふ世も梅

雪のりるりにあつらふはけるをよのいよに

あまねけりよりのあつらふをよのいよに

花のりるりにあつらふ 後朱雀院行幸

天地よりあつらふ年のあつらふをよのいよに

左大臣の表もあつらふ年月つら後さうよ大臣

右大臣の表もあつらふ年月つら後さうよ大臣

善の言後あつらふよ 前左大臣

雪のりるりにあつらふをよのいよに

祝言後あつらふ中に

後京極坊の前左大臣

秋のりるりにあつらふをよのいよに

後一孝院の表もあつらふ年月つら後さうよ大臣

も入道前坊の言もあつらふをよのいよに

善武部

いよのりるりにあつらふをよのいよに

河内坊の言もあつらふをよのいよに

前中納言の言もあつらふ

表もあつらふをよのいよに

つら

お雪乃らりりてはてしなくもねるのちよそいりてい

源家長朝也

とみぬしをさういふを花也わらりての志のをさまよ

歌や

入道前左衛門也

ありぬし何歌さそえをの世も花をいりぬを方いさりけり

又永二年九月十三日言合し何月也

前内白丸大也

万代にうてそまじ月もち成りてをさうしむき他の友何

花を信しうとて言しあもまはしは家娘

無じいし

た道中持る雄

幾の世の友をいぬしをのそらり所の上りてま月

崇徳院百三言

皇太后宮大史後成

老の代にをのそらりし人のちもいりてことか

天保二年二月大井河の御幸にけりうぬいせ

よみはけり

前中納言延有

大井河の遊りてすいすじ水のくみのまにわいよ

七葉のこころもくぬにさくつみよ書付

は

前内大也 春

せうこ波よとけり子もは鳩みりていしにみりて

は

ち上天皇

和奇海の波よとくくはしきし草かき雨にぬる玉とみ

元久二年三月廿六日新古今集竟宴をこゑ

飛けるよとゆとぬける

後鳥羽院侍

るよちりきそ今なるそくし昔のわしをゆきこつに

後京極坊政前右大臣

とよこしゆつとまし言葉の海よりむらひし玉ふりしれは

後法隆寺入道前白河家百三十一

後惠法師

志の代にけしちのうしにわまらくる秋とよ年をゆにけ

きき

るよ海松のむらゆらとみ

惠慶法師

うしきちのこまふふ秋とよしと松のちとまよと秋波のし

院

建保三年六月秋の所のみとよ合よ松経年

控大納言忠信

限るこち地と志よわふとる志の廣松いく世

ふと色い

祝歌の中に

鎌倉右大臣

志の代と我世にけしとる川とよこのを川のさしと思

まねちしとこつとる代に合うこつとかゆしと

后三位頼政

志の氏にありしは、やうそものこゝろに、
歎しつゝ、
よみ人

秋をしのび、
大業にこそ、
傳ふれ意

あつゝ、
歎しつゝ、
蘇大納言為家

八百方、
正元二年、
中務マ親

すし、
日本紀、
清慎が

池水に、
後集、
贈志義義忠

照月乃、
承保元年、
蘇中納言退房

い、
い、
い

い、
い、
い

久壽二年大嘗會言

言けり永範

おほむれらるゝにわづきのついでに幾度か代よすゆふに
建曆二年大嘗會悠紀方屏凡言もほり

亦中納言實實

すつ乃祢のなつゝのまねねるゝくふれに代のま

仁治三年大嘗會也屏凡言

大藏卿長

くふよりうめねねねちさうとなくたのこつとをえよつに世

ゆ又百番言合ふ ちち門の人た

わゝゝい巻のうへなるよをれいよ世をかゝるゝ毛衣

長二位家隆

久しうあまふとくしえりれくゝにひる月日

我老のつら

續古今和詩集序

夫天地之二儀共成一物化神雌雄之兩
元相遺八列分號有日月然後有人倫有
人倫然後有和歌起自素鵝汎鳩之川陽
被于栴奉山遑之秀士以降千五百餘之
地年紀雖廻環三十一字之篇夙躋猶連
綿源浚若流遠根固者本長息澤洽者比
通他比通他者其國昌宜哉上好而賞之
下舉而後之蘭芬菊耀之方互競陶染之
功花心月性之客各為周遊之媒於是聽

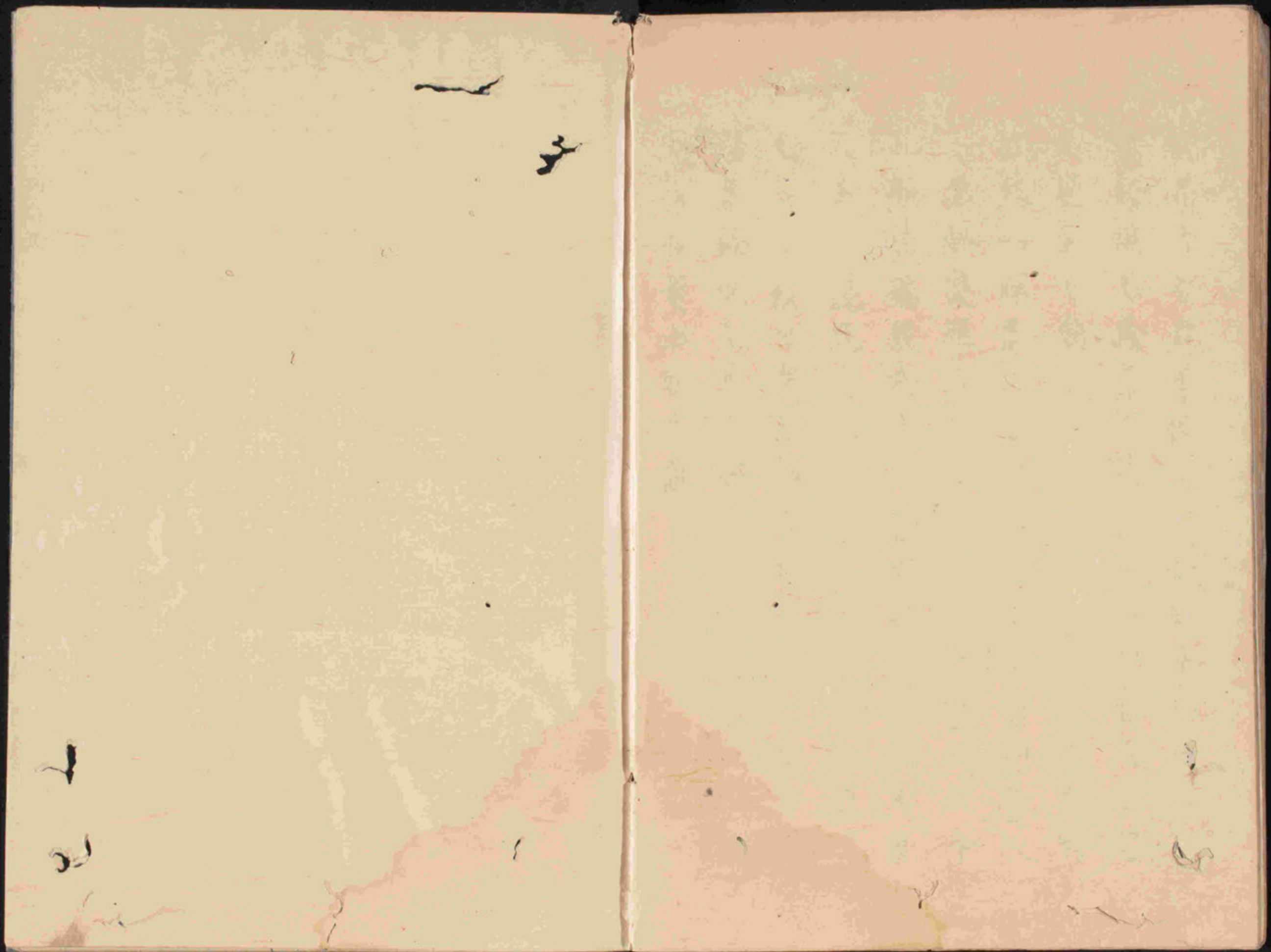
政事之次命侍臣而曰
身帝君臨之第六載遍樂若寧民黎子來
而自萬方皆獻花祝衆正之聖智易史萬
機之諮詢多隙屢更餘閑將撰一集萬葉
集者 平城皇朝課英後多被降是詔古
今集者 醍醐聖代勅曰人之欲傳百王
自尔以來継芳塵而總編及十代挺佳句
而類聚餘萬有案之凡付何有遺漏然而
霍山之玉拾而不盡廉水之金掇而有餘
為皆如此評亦相月肆賞延喜元久之勝

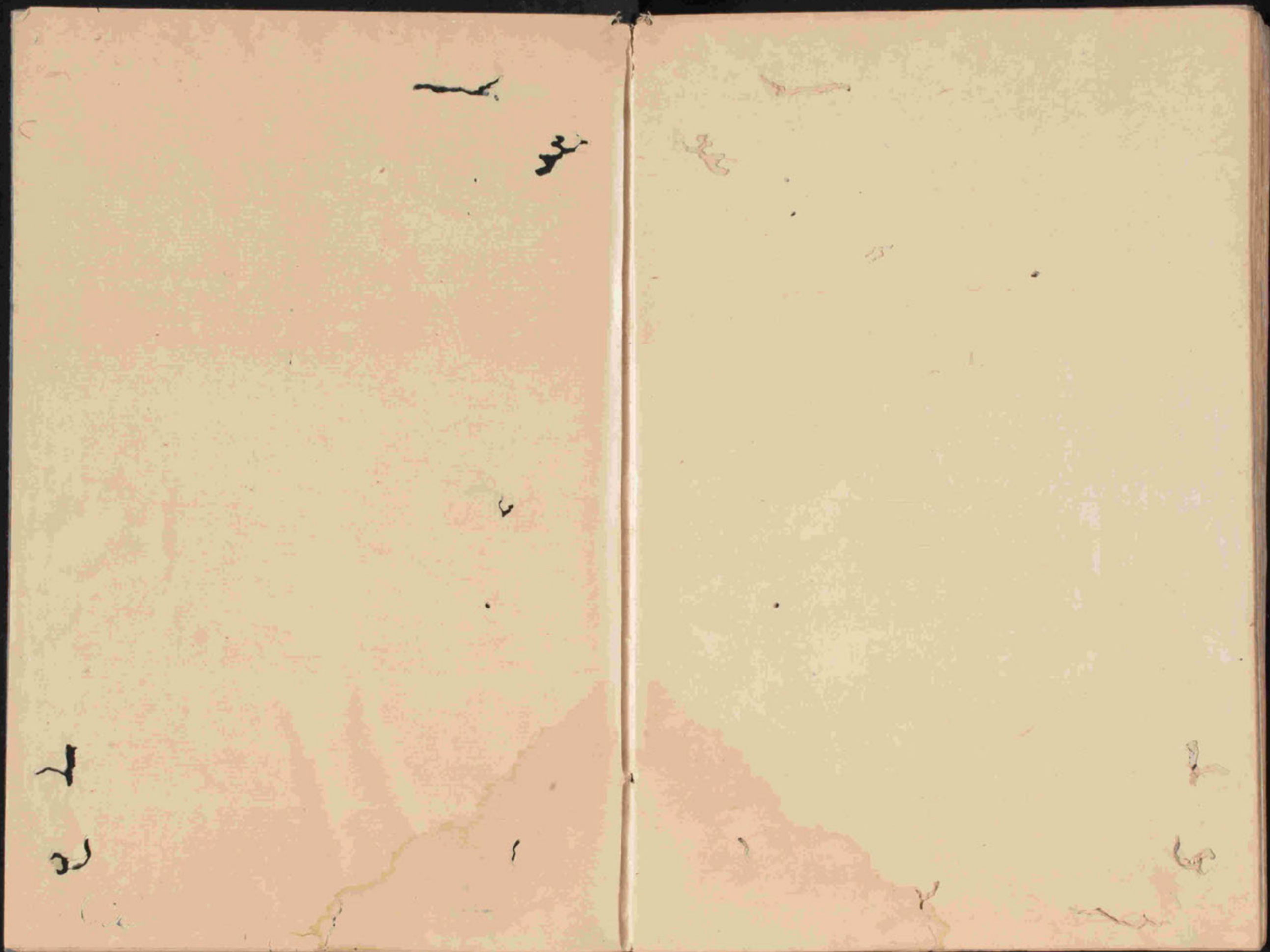
跡殊卜枝幹相慈之佳期乙者木也其性
如空虛厥形有花葉壯觀無過之即為歌
一 莽且者土也居終始之際得紋結之名萬
只顯自之又為歌德云乙云丑月躋月德
故古今集序曰和詩者託其根於心地發
其危於詞林上句者去也下句者木也木
非去不生之故也此一句之趣叙二字之
理相當此歲恢弘我道五代為集有以有
由哉仍詔前代大臣藤原朝臣民部卿藤
原朝臣為家依足藤原朝臣行家若大辨

藤原朝臣克俊等人人家家之集尊早編
書之次皆完精要各令是進最初萬葉集
依為監觴猶採之其後十代集雖多綴玉
悉除之伏惟道位於九禁為父千二帝桃
花源之春菊花源之娘留春娘於始舉之
危色青松洞之凡赤松洞之月移凡月於
仙洞之松陰就巧方外之居而握斲引彼
端右之才而琢磨擣花摘實深索凡骨之
妙或詠或吟廣披露膽之詞取捨兮得二
千首部類兮為二十卷名曰續古今倭歌

集方今之勵抗擢自不暫捨雖隨後鳥
鳴上皇之獻襟恥隔彼鳳毛中皇之秀章
而今上陛下天才日新月脆仙院躬言
業於芝砌中書文王積訖范於李蹊不堪
軌道之志怒聚難周之句還恐令後之觀
今勝今之觀古於戲天生萬物之形
容區分年有四時曰時之景趣互好之外
之難類完整意竭之感思非一釋門之他
神道之詠緯在幽玄尤貴情素此中昌泰
之右相若絕妙之上才也累代集雖加廣

氏鼎之貌尊德之餘今載藝祠篇什之
字修撰之義蓋云備矣凡和款者志之所
之也氣之動物物之感人情蕩於中言形
於外以暉廉之才以和理乃有營國營人
之要與雙照古照今之義第一譬猶說命
孔昭能礪殷武丁之全徽諫不暗誠為唐
天子之鏡匪魯比三易之起象意亦將曰
无臣之效合應蓋以三代古今之撰宜為
諸集編次之最文永二年玄陰季月大綱
之趣右筆而勒云爾





1

2

3

4

5

6

7



